Resonance?W?

前奏曲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｒｅｓｏｎａｎｃｅ？Ｗ？

【Ｎコード】
Ｎ７０２２Ｘ

【作者名】
前奏曲

【あらすじ】
少年には、他人には見えないあるモノが見えていた。二重を歩く者、ドッペルゲンガー。彼を嘲り続けるその存在は、少年にある警告を残す。ある日の放課後、少年が迷い込んだ、全てが歪みきった世界。そこで少年は、一人の少女と出会う。やがて、少年は迷い込む世界で試練を課されることになる。
日常と非日常が共鳴しあい、世界の境界は歪んでいく。非日常の中で、少年は『自分』を見つめなおしていく。

カモメレポート０（前書き）

カモメレポート0

やあ、こんにちは……いや、こんばんはかな？　それともおはようだったりするかい？

ま、そんなことはどうでもいいよね？

良くない？　おいおい、冗談は止してくれ。挨拶なんてものに意味はないよ？　大体、挨拶したところで君と僕が友達になる訳じゃないんだから。

……怒るなよ、怖いなぁ。屁理屈言うなって？　やれやれ、いいかい？　屁理屈だって理屈なんだ。理解できないからといって駄々をこねないでくれ。

……やれやれ、これから話そうっていうのに逸れてしまった。君の所為だよ？　ま、責任の十割は僕だけどね。本当のところ、君には一片の責任もない。

……お、堪えたね。ちゃんとやればできるじゃないか。その調子で頼むよ？

じゃあ、話そうか。

……まず、問うておこう。世界って何だと思う？

ああ、答えなくていいよ。これは僕の個人的な独り言。レポートなんだから。君は聞いてるだけでいい。

話を戻そう。

この問いにはね、答えなんてないんだ。どういう意味かって？簡単さ。

ある人が答えるとするなら、この世界の物質は全て三次元で構成されていて、そのあらかじめ定まった形の集合体こそが世界だと言うかもしれない。

またある人ならどうだろう。ロマンに溢れる人物なら、宇宙の何処かには人間と同じような存在がいて、それらが住んでいる――――つまり、僕達の場合だと、今立っている地球という惑星そのものが世界だと言うかもしれない。

でも、普通に考えて――――まぁ、普通なんて存在しないものだけど――――誰もがそんな考え方をしている訳じゃない。皆、自分の目に映る空、地面、人。それを指して世界と呼んでいる筈なんだ。

世界の裏側で何百人、何千人死んだところで、僕達個人個人の認識する『世界』にはこれっぽっちも影響しない。そういうものなんだ。

でも、今挙げた例ってさ、結局は個人視点からのものに過ぎない。

つまり、何が言いたいかというと、世界は人の数ほどあるってコト。人の心が求めるままに、認識するままに、新しい世界が拓かれ

ていく。

よく、生まれ変わった気分とか、目から鱗が落ちるとか言うけれど、それはつまり、既に持っていた世界が何らかの要因によって姿を変え、新しく生まれ変わっている、という事になるんだ。

まぁ、この場合視点が１８０度変わる場合が多いから、コペルニクス的転回なんて言ったりもするけどね。

要するに、世界ってものはすごく曖昧であやふやだって事を理解してくれればいい。

ここまではいいかい？　ついてきてる？　うん、結構だ。次の話に移ろうか。

大丈夫、今までの話としっかり関連しているからさ。

じゃあ、話すよ？

僕はね、今の職業は研究者だ。とはいえ、君が想像しているような博士とかいう大層なものじゃなく、個人的にそう名乗っているだけ。

僕は、昔は心について研究していた。いや、今もかな。とにかく、心と言うと心理学を思い浮かべてしまうかもしれない。

正確に言うと、心理学は心の研究ではなく、刺激を与えた際の反応を観察し、その行動をデータ化、統計したものに過ぎない。つまり、心の研究なんかしていないって事になるね。極論かもしれないけど。

でも、間違っているとは思わないし、君がどう思うかも自由だ。

……また話が逸れた。

とにかくね、僕がやっていたのはそんなものではなく、本当に人の心を探っていた。思考や感情、それが何の意味を持つのかをね。

そんな研究の最中、僕は興味深い物を見つけたんだ。それも、自分の中に。それと、僕を取り巻く世界にも。

時折ね、僕が何かしらの強い感情を持った時、それも、いわゆる妬みとか憎しみだったりした時、ソレは出てきたんだ。

世界に開いた孔。と言っても、別に視覚情報がある訳ではなく、ただ其処にあることが分かる。ただ、僕以外の人間には分からなかったみたいだけど。

僕もやっぱり人間だ。興味を持った。だから、触れてみた。どうなったと思う？

そこにあったのは、世界だった。それも、とても歪んだ、ね。

ありとあらゆる物がおかしな方向に捻じ曲がって歪んでいた。でも、驚いたのはそこだけじゃない。

空にはさっきまでいた筈の研究室があったんだ。当然、そんなところに行けるはずもない。戻る事は出来なかった。

仕方なく、僕は探索を始めた……ま、半分は好奇心だったけどね。

まず分かったのは、人は存在しない、というより何もないってことだ。だが、何かしらの気配に満ちていた。そして、何故か闘争本能が刺激される。

そこで僕は不可思議な状況に陥った。何かに追われていたんだ。そして、それが、あの世界が僕に与えた『試練』だった。

同時に、僕には力が与えられた。所謂、超能力ってやつだ。

眉唾だと思うかい？　でも、真実だ。

その能力の発現条件、というより、力の発現には意味があったのだけど、此処では話せない。混乱させるだけだしね。

どれだけの時間逃げ回り、またどれだけの時間対峙したのかは分からないけど、紆余曲折の果て、僕は戻ってこれた。

けど、全てが元通りという訳ではなかった。

僕が通った孔、それは広がり続け、世界を覆っていたんだ。あの世界の歪みは、世界を覆う程に大きくなっていた。まるで、現実に

共鳴しているようだった。

そして、僕と同じ、能力を持つ人間たちもまた、秘密裏に生まれ始めていた。

恐らく、僕と同じように、あの世界に招かれる者が出てくる。

あの世界が僕達に何をさせる気なのか、それは分からない。

けれど、一つだけわかる事、それは、あの世界は僕達を試しているという事だ。

実に面白い。

世界に招かれた者、あるいはこれから招かれるであろう者に接触する。

あの世界に入らせ、それぞれの『試練』を受けてもらおう。そして、彼らが得るであろう異能で殺し合いを演じてもらう事にしよう。

結果はどうあれ、あの世界にとっては不測の事態となる筈だ。

彼らがあの世界にどんな影響を与えるか、そして、あの世界は彼らをどのように変質させていくのか。

これからの僕の、最大の研究だ。

とりあえず、あの世界に名前を付けてみよう。

安易だけれど、『共鳴世界（レゾナンス・ワールド）』としよう。共鳴し、歪み続けるあの

世界にはうってつけだ。

ネーミングセンスがないなんて言わせない。自覚はあるしね。

さて、君にまた会える日を楽しみにしていよう。

二〇××年　＊月＊＊日　＊＊＊　＊＊（名前は消されている）

カモメレポート０（後書き）

初めまして、前奏曲です。二次創作の方でお世話になっている方々には、お久しぶりです。

こうして自分で一から十まで設定を作り、話を展開していく小説と言うのは、実は初めてだったりします。二次創作は、ある程度の基盤が出来ていますから、まだ書きやすい所もありますね。

兎にも角にも、こうして皆さんのお目にかかれることを嬉しく思います。

文章の構成が甘いかもしれませんが、どうかご容赦ください。

感想や批評も受け付けております。何かしらアドバイスをいただけたら、改善していくように努力していきたいと思っています。

長くなりましたが、今後ともお付き合いよろしくお願いします。

前奏曲

序章

夢を見ている。そう、彼は認識出来ていた。

ビルに生えた家、信号機から生える木。全てが歪んだ世界。幾つもの異常と取れる光景を余所に、夢の主である少年はぼんやりと空を眺めていた。

少年の心の内に郷愁が宿る。この場所を、知っている。探していたもの、今も探し続けているものが、この場所のどこかにある。

「……」

少年は空から目を離し、足元のアスファルトに生えた花を摘もうとする。

だが、それは叶わない。それも当然、もとより此処は夢。手に触れる事は叶わない場所。

「……？」

ふと、視線を感じた。誰かが見ている。

少年は辺りを見回す。知らず、胸の鼓動は高まっていた。それが高揚によるものか、危機を訴えるものか、少年には分からない。だが、両方だという事も理解できている。

「あぁ……」

長い、長い息を吐く。振り向いたその先に、少女がいる。先程の息は、安堵だ。

見つめあう。少女の事は知らない。けれど、良く知っていると心が叫ぶ。

「……」

「……」

少女が、微笑んだ。名を呼ばれる。声は聞こえない。白藍の髪を風になびかせ、瑠璃色の瞳が少年を映す。

心がざわつく。手を伸ばす。指が伸びる。触れる。

「……！？」

パリン、とガラスの割れる音が響く。少女が砕け散る。罅が地面に、空に、建物に広がっていく。

「――――――！！」

崩壊していく世界で、駆は必死に少女の名を呼ぼうとする。だが、出てきた声はただの音だった。駆は少女の名を知らない。だから、届かない。

せめて繋ぎ止めたい――――――その一心で再び駆は手を伸ばす。

その手を、誰かが掴んだ。心臓が跳ねる。これは、危機だ。キケンなモノが、手を掴んでいる。

『よお、静原駆(しずはらかける)。もうすぐお目覚めの時間だ』

「……」

そこにいたのは、駆自身だった。歪んだ笑みを浮かべ、動けない駆を蔑んでいる。

『悪夢だと思うかい？　違うな、お前が望んだのさ。どういう意味かわかるだろう？』

「……」

どれだけ蔑まれても、駆には何も言えない。駆は、知っている。

あの日、駆を取り巻く人間関係が崩れた時から、この男は常に其処に、此処に、何処にでもいて、今も存在し続けている。

『お前と俺は同一の存在。どちらが本物かなど意味を為さぬ問いだ……お前が俺で俺がお前だからな』

「……」

?駆?の言葉は言葉遊びであり、真実でもある。二人は常に共鳴している、それを理解していても尚、駆は、?駆?を受け入れられない。それが、必要だと分かっているのに。

世界が崩れ去る。暗闇の中で、ただ二人だけが存在していた。

見つめあう二人の間には既に敵意も恐怖も怒りもなく、ただ其処

に在るものを眺めているだけだった。

『さて、そろそろ本当にお目覚めだ。いいユメが見られなくて残念だったな？』

「……」

蔑むように、憐れむように。だが、愛しさを含んだ目をしながら？駆？が歪んだ笑みを浮かべる。

それでも、駆は何も言えなかった。

『次に会うのはゲンジツだ。精々足掻いてみるんだな』

「……」

？駆？の姿が闇に溶け、残ったのは駆だけ。寒さに凍えるように駆は身体を抱きしめる。

闇は駆をも呑みこんでいき、その心を覆う。発せられたはずの、今も発し続けている筈の声を打ち消して、闇が覆う。

そして、何も見えなくなった。

眠りは――――――醒めなかった。

序章（後書き）

感想、批評、アドバイス等お待ちしています。

拙い文ではありますが、今後ともお付き合い下されば嬉しいです。

第一話　自己像幻視の警告

カーテンのない窓に朝日が舞い込む。部屋全体が朝日に照らされ、その眩しさでベッドに眠る少年、静原駆は目を――――――覚まさなかった。

寝息も聞こえない程静かに眠る駆は、一切動くことなくベッドに横たわるだけだ。と、部屋の扉がノックも無しに無遠慮に開けられる。

「寝つきがいいのは結構だけど、あまり寝すぎると危険って言うんだからさ、起きろよ、クズ」

入ってきたのは二十代前後の男だった。口元に微笑を浮かべつつも、その言動は駆に近づくにつれてだんだん乱暴になり、ついには暴言までに昇華（？）される。

男は眠る駆の顔に口づけができるほど顔を近づけ、さらに暴言を吐こうとして――――――いきなり起き上った駆の（結果的に）頭突きを喰らって悶える事になった。

「い、痛い……。おい君さ、もう少し配慮ってものがない……ねぇよな畜生！」

「五月蠅い、お前が悪いんだろ……大体、隣の部屋の筈のお前が何で入れるんだ？　全く……で、海猫、今何時だ？」

やはり暴言を吐きつつも涙目な海猫、と呼ばれた男の抗議を少年は一刀両断し、マイペースにぼんやりとぼやくと時間を確認する。

すると、海猫の顔がニヤリと厭らしく歪む。

「愚問だね。鍵がなくともピッキングという手段があるだろう？
時間に関してはもう七時半だよ。とっとと準備しろよクズ。朝飯はお前に任せてんだろ？」

「わかってる……」

いつの間に着替えたのか、学生服に身を包んだ駆はひらひらと手を振ってキッチンに立つ。

登校まで時間がないので、フレンチトーストにでもしよう……などと考えつつ、駆は慣れた手つきで卵を割り、牛乳と砂糖を加え、食パンの耳を切り落とし、パンを浸す。

ここまでの時間に一分とかからなかった。

「あ、駆君」

「なんだ？」

声を掛けられ、トーストを焼きながら駆は海猫を振り返らずに面倒そうな声を返す。

駆のある種敬意のない態度に海猫はニヤニヤとした笑い顔を一層嫌味ったらしく歪めた。

「普通こういう朝は幼馴染の女の子が起こしに来てくれるのがお約束だけど……どう？　やっぱり君も期待してたりするのかな？」

「……バカか？そんな妄言吐いてる余裕があるなら、仕事しろよ」

残念すぎる海猫の質問に駆は呆れて溜息を吐き、トーストを裏返す。

幼馴染がいるにはいるが、今はあまり積極的に関わろうとしていない。逆もそうかと問われると駆としては苦い顔をするしかないが。

「いい年したおっさんが、今更色気づくなよ。もう少し若返ってからにしやがれ」

「ひどいな。僕はまだ２０代だっていうのに。君は本当に話の分からないクズだねぇ」

駆の皮肉にもニヤニヤとした笑みを崩さず、海猫は駆をからかう。

いつも通りの罵倒に、駆は満面の笑みで応えた。

「出来たぞ、海猫……残すなよ？」

いつの間に用意したのか、海猫の前には先程の食パンの耳と、洗って千切られただけの大量のレタスが鎮座していた。

＊　＊　＊

「まったく、相変わらず嫌な奴だ」

通学路を歩きながら、駆はぼやく。だが、その表情はどこか嬉しげだった。

もちろん、暴言を吐かれて喜ぶような性癖は駆にはない。

だが、駆がはっきりと自分の感情を露わにできる人間は数少ない。海猫は、その数少ない人間の一人だった。

自分にはまだ感情が残っている。それが確認できたことがただ嬉しかったのだ。

「おーい！　駆！！」

「……ん」

後ろから聞こえてきた声に駆は立ち止まり、振り向く。

息を切らせて走ってきたのは髪をポニーテールに束ねた少女だ。

「おはよ、駆！」

「ああ。……何も走ってくる必要はなかったんじゃないか？　藤沢」

パシン、と小気味よい音を立てて駆の背中を叩く少女に駆は呆れを多分に含んだ溜息を返す。

「あ！　また名字で呼んだ！　前みたいに美紀って呼んでよ。幼馴

染なんだから」

「……いいだろ、別に」

頬を膨らませて睨んでくる美紀の視線から逃れるように駆は目を逸らすと、ぼそぼそと呟いて反論する。

「あーあ、駆ったら、変わっちゃったよね。昔は素直だったのに。ねぇ、やっぱり……おじさんとおばさんと喧嘩したから？」

「違う……と言いたいけど」

睨みから一転、おずおずと切りだされた両親の話に駆は眉間にしわを寄せる。

３年前の話だが、駆と両親は大喧嘩をしていた。原因は進学についてだった。

駆は当時、学年でも成績は上位に位置しており、有名校への進学を強く望まれていた。

両親は息子の教育には人一倍熱心で、次々と塾のパンフレットを持ち帰っては駆に見せていたが、そんな両親に辟易していたためと、自由な時間が欲しいという思いからすべて断っていた。

当時の駆は１４歳。将来のヴィジョンもあやふやで、何がしたいのかもわからない。

そんな状態での三者面談に於いて、母は有名校への進学がまるで駆自身の意思であるかのように、それはもう熱烈に語ったのだ。

当然駆は憤り、家に帰った後に猛然と抗議したが、母は駆の言葉を聞かないどころか逆に有名校で得るネームバリューの素晴らしさを滔々と語り、丁度帰ってきた父もまた、何が悪い、といった開き直った態度だったのだ。

自分の進む道を勝手に決められていくように感じ、反抗期だった事も手伝って啖呵をきったところ、父には殴られ母には怒鳴られの大騒ぎとなった。

結局、それ以来関係は修復されることは無く、冷戦状態のまま一年が過ぎ、駆は両親の希望とは別の高校、私立鷹翼学園へと進学することを選んだ。

わざわざ私立を選んだのは、学費を払う立場になる両親への嫌がらせもあるが、自由な校風というものに惹かれたからでもあった。

当初、親が学費を払わない事を駆は懸念したが、流石に気まずさがあったのか、それだけは回避されていた。

「でも、なんで一人暮らしなの？」

「喧嘩してるから」

「もう……おじさんもおばさんも反省してるって言ってるよ？　許してあげたら？」

「どうせ口だけさ。それに、俺が謝るんじゃなくてあのバカ共が謝る立場だろ」

急に話題を変える美紀。

駆は明らかな怒りを込めた激しい口調で答えるが、その答えが不満だったのだろう、頬を膨らませる。

「そんなことないよ。二人ともちゃんと話したいって言ってる。だから駆も、ね？」

「知るか。じゃあ、向こうから出向いてこいよ。俺が行く義理は無いだろうが。大体、藤沢が俺に関わる必要はないだろう？」

「それは……でも、心配だし……」

殊更冷たく言い捨てた駆に美紀は悲しげに顔を伏せる。一向に改めない呼び名に対してか、冷たくあしらわれたことに対してか、泣きそうになるのを堪えているようにも見える。

気まずい空気が流れる。流石に駆も言いすぎだったのは理解しているので、そっと隣を見る。

藤沢美紀。駆の幼馴染であり、クラスメイトでもある。明るく、世話焼きな性格で他人から一歩引かれる（駆が自ら遠ざけているというのもあるが）傾向のある駆にも愛想よく話かけ、クラスでも男女問わず人気者である。

実を言うと、両親との喧嘩を仲裁したのは彼女なのだが、こういった事に慣れていない彼女の涙ぐましい努力にも拘らず仲直りするはずが冷戦状態にまで縺れ込んだのは、駆と両親達が必要以上に意固地になっていた所為だが、それすら自分の所為だと思い込んでいる節がある。今回もその責任感からの発言だろう。

責任感が強いというのは美点の一つだが、強すぎるのも考えものだ。その分、彼女は損をしていると駆は常々思っているが、彼女自身は全くそんな事を考えていないらしい。

本人は言わないが、美紀が自分と同じ鷹翼学園へと入学したのも、駆のためであり、駆自身既にそれに気づいている。

「まぁ……八つ当たりだったのは認めるよ。ごめん、美紀」

「え……？　あ、ううん！　大丈夫！」

流石に申し訳なくなって、駆は謝ると同時にそっと名前を呼ぶ。

それに反応したのか、美紀はパッと顔を上げると向日葵のような笑顔を浮かべる。顔を赤らめ、えへへ……と緩みきった顔で鼻歌まで飛び出す始末だ。

余りの変わり身の早さに駆は溜息を吐く。駆自身の所為であるのだが、どうにも納得がいかない。

美紀が喜ぶ理由は他にもあるのだが、それを察する事が出来るほど駆は成熟していなかった。

『狡い男だな、お前は』

「……」

突然聞こえた声に駆は立ち止まる。美紀がどうしたの？　と言うように首を傾げたが、駆は手を振って先に行け、と促した。

「え、どうしたの？　忘れ物？」

「ん……そんなところ。先に行ってくれ」

「でも、遅刻しちゃうよ？」

納得できなかったのだろう、美紀は携帯に表示される時刻と駆を見比べながら心配そうな顔をする。

「大丈夫、間に合わせるから。じゃあ、教室で会おう、美紀」

「え、あ！　ちょ、ちょっと～！！」

慌てる美紀を余所に、駆は踵を返すと走り出す。角を曲がり、美紀の視線から逃れると、それに向き合った。

『おーおー、また嘘を吐くのか。狼少年の話を知らないのかい？』

「お前の所為だろう……」

駆は目の前の少年を睨む。

同じ顔、同じ声、同じ姿。鏡に映したように正確な？駆？自身の姿。だが、鏡などどこにもない。

ドッペルゲンガー。和訳して【二重に歩く者】の名を持つ存在。医学的に言えば脳の側頭葉と頭頂葉の境界領域に腫瘍がある者が見る事が多いらしいが、生憎と駆にそんなものはない。実際、医者に行って自身の貯金をつぎ込んで診てもらったのだから確かである。

オカルト関係であれば、ドッペルゲンガーとは死の予兆であり、成りすました人物を殺してすり替わる等のものがあるが、今までそんな様子を見せた事はないし、するつもりもないと言う。

『俺の所為？　いいや、お前の所為さ。いつも言っているだろう？俺はお前に影響を与えない。お前がお前に影響するだけさ』

「現に遅刻しそうだがな」

歪んだ笑みを浮かべて嘯く？駆？に駆は不機嫌さを隠さずに眉間にしわを寄せる。

『それだってお前が望んだことさ。お前は在りもしないものを視て、在りもしないものを追いかけた。たったそれだけ、だがそれ以上でも以下でもない事実だけがお前に残るんだ』

「くっ……」

ああ言えばこう言う。だが、客観的な事実を言えば確かに？駆？の言うとおりであることは明白で、その事実を前に駆は歯噛みするしかない。

『おっと、此処までだ。青春の匂いが漂う学園生活と洒落込もうじゃないか』

「はぁ……」

歪んだ笑みを浮かべながら陽気に告げた？駆？に駆は溜息を吐き、携帯で時間を確認する。８：５０と表示されているディスプレイに

深い溜息を溢すと、トボトボと歩きだす。

完全に遅刻だった。

笑い転げている？駆？を駆は睨むが、此処まで留まっていたのは駆自身の意思である。傍から見れば何もない所で壁に向かって話す怪しい人物だったのだが、幸いなことに通学、通勤ラッシュは過ぎていた為に誰かに見咎められることは無かった。

走っても間に合わないから、開き直って歩いて行こう……などと考えていた駆を、？駆？が呼び止めた。

『おい、静原駆』

「なんだよ？」

『大したことのない戯言だが……カエリミチに気をつけろ。お前はもう、エラバレテイル』

「……？」

戯言にしては不吉な予感を伴う言葉に駆は眉をひそめる。

？駆？は警告を発しながらも、巻き込まれることを望んでいるように見えた。それも、とても強く。

太陽に照らされていたアスファルトが雲が覆った事で暗くなる。再び明るくなるその一瞬、？駆？の目が妖しく光る。

「ッ！？」

恐怖が這い寄る。まるで暗闇から手が伸びてくるのを恐れるように駆は一歩、二歩と後ずさると、学園に向かって脇目も振らずに走り出した。

?駆?の発した不吉な声が、耳に張り付いて消えることは無かった。

＊　＊　＊

「遅刻だ、静原」

「……すいません」

結局、昇降口に入って息を整えていた為に余計な時間を食い、ただでさえ遅刻だった登校時間を大幅にずらすことになった。

授業を中断されたことに対しての苛立ちか、現国の教師である三条が神経質な声で駆を咎める。この三条という教師は、授業中に私語が一つでもあれば次の時間までダラダラと嫌味全開で怒る事で有名であり、学園中の生徒から嫌われていた。

そんな三条に素っ気なく返事をし、一瞥すらせずに席について準備を始めた駆に三条は目元を戦慄かせるが、寸前で抑えたのだろう、咳払いをすると授業を再開する。

クラスメイトはチラチラと駆を見ていたが、もう一度三条が咳払いすると慌てて視線を黒板に戻す。

駆はそんな視線を全て無視し、ノートに先程の言葉を書き連ねていた。

結局、その時間の授業は全く集中できず、内容も理解できないまま終了のチャイムがなる。

「では、ここまで。皆さん、遅刻はしないように」

「……」

最後にもう一度嫌味を残し、三条が教室から出る。それにホッとしたように全員が溜息を吐くと、思い思いに動き始める。友達と話し始める者、次の授業の準備をする者。その中で、駆に近づく生徒がいた。

「社長出勤とは余裕だね、静原君？」

「……」

もったいぶった口調で話しかけてきたのは、癖毛を無造作に垂らした男子生徒だった。駆を小馬鹿にしたような態度で舐めるように見つめているが、駆が反応すらしないのに苛立ったのか、再び声を張り上げる。

「おい！　聞いてるのか！？　ボクが話しかけてやってるんだぞ！？」

「……お前、誰？」

大声にクラスのほとんどが駆と男子生徒の方を振り向くが、呆れたような溜息を吐くとまたそれぞれの行動に戻る。

この男子生徒は駆が一年の時からテストの成績で張り合って（駆はそんなつもりはない）いて、駆は全教科で上の点数を取っていたため、目の敵にされているが、駆にとっては特に気にする必要も、相手にするだけの関心すらもない相手だった。

五月になり、クラスメイトもいつもの事だと分かっているのだろう、それ以上の関心を持つことは無かったが、駆の気の抜けた発言が聞こえたのだろう、吹き出す者もいた。

「ボクの名前を覚えていない……？　君と一年間ライバルとして張り合ったボクを……？」

「だから、誰だよ」

「駆、まだ覚えてないの？　千里君だよ、千里崇君（せんりたかし）」

ヒステリックに声を張り上げる男子生徒――――――崇を駆は一瞥すらせずにイライラと返す。

さすがに見かねたのか、近づいてきた美紀が助け舟を出す。

「そう！　この千里崇が今度こそ君に勝つ！　覚悟するんだね！」

「……ああ、そういえば見た事ある、かな？　それで？」

駆としては、名も知らない生徒にいきなりライバル宣言され、上から目線で戯言を言われただけの認識だったが、ようやく思い出し始めたのか、一層冷たい目で崇を見上げる。

成績に関して、４月に行われた実力テストでは駆が五教科４６５点で５位、崇は４３０点で８位だ。この時点でライバルかどうか怪しいが、この手の手合いには言うだけ無駄な事は経験則で駆にもわかる。

「なに？」

「いや、覚悟してどうするんだ？」

「なっ……」

駆の発言があまりに予想外だったのか、崇は顔を赤くしたり青くしたりすると口を鯉のようにパクパクさせる。

駆はそれを無感情に見据えると、溜息を吐く。

「どうでもいいから、向こうに行ってくれ。邪魔」

「くっ……いいだろう！　覚えていろよ！」

「知るか」

肩を怒らせて立ち去る崇を駆は冷めた目で見つめる。駆としては、何がそこまで崇を駆り立てるのか分からなかった。

「もう、駄目だよ駆。あんな言い方したら、誰だって怒るよ？」

「興味ない」

「それが駄目なんだよ。もう少し周りに気を配んないと。駆、一年生の時は周りに壁造って友達いなかったし、二年生になってからもそう。もう一か月も経ってるのにクラスの皆と話さないし……」

頬を膨らませて窘めてくる美紀に駆はぞんざいな返答をする。

それにまた気分を悪くしたのか、美紀はジト目で駆の胸に突き刺さるような一言を言い、その言葉は駆を大いに不機嫌にさせた。

「どうでもいいだろう！　それより、次の授業が始まるから、さっさと席に着けよ、藤沢」

「あー！　また名字で呼んだ！　朝は名前で呼んでくれたのに。うぅ……」

どうやら彼女の中では授業よりも駆に名前を呼ばれることの方が優先度は高いらしく、泣き真似をしながら席に戻っていく。

その際に叫んだのが耳に入ったのだろう、教室がざわつき始める。

「静原が……藤沢さんを名前で？」

「あの二人、幼馴染なんだって」

「えぇー！」

「マジかよ……あんな奴が？」

ひそひそと話される内容と、それに伴う視線に駆は頭を抱える。

正直、こうなる事を駆は恐れていた。

美紀は学年でもかなり可愛い部類に入り、ファンクラブがあると噂されるほどの少女だ。対して駆はあまり人付き合いが良いとは言えず、どこか孤高の存在であるかのように扱われている。

だが、駆に向けられるそれは決していいものではなく、寧ろ厄介者を邪険に扱う類のものだ。

幼馴染として釣り合う釣り合わないなどは問題にしていないが、駆は割と敵意を持って接されることが多いので、美紀に迷惑が掛かるのは駆としては避けたいところだった。

彼女を敵視し、嫌がらせをする者はいないだろうが、それでも悪評というのはついて回る。駆はその悪評が駆自身である事を理解していた。

「……はぁ」

知らず、溜息を吐く。

駆とて、現状に何も思わない訳ではない。むしろ、人目を気にせずに嘆きたいところなのである。

元々、愛想のいい方ではなかった駆だが、それなりにいい人付き合いをしていたのだ。だが、それは3年前の大喧嘩で崩れてしまった。

人との接し方が分らなくなってしまったのだ。

父や母と同じように、皆も自分に何か押し付けようとしているのではないか、裏で自分を裏切っているのではないか……そんな疑心暗鬼に囚われ、誰も信じられなくなり、どんな態度で接すればいいか見失ってしまった。

そんな日々が過ぎるうち、親しかった者はすべて他人になっていた。別にいじめがあった訳ではなく、駆が自ら、何の為かもわからずに遠ざけたのだ。

そして、駆は独りになった。唯一美紀だけは変わらずに接していたが、駆はそれすらも信じられなくなっていた。今は緩和され、普通に接しているが、根底にある恐れは消えてはいない。

そして、?駆?が姿を現したのもその時期だった。

ある日、目の前に姿を現した自分自身に駆は大いに混乱した。いや、最初に覚えたのは殺意だった。自分が消えてなくなる事への、アイデンティティ――――――自己同一性が崩壊する事への恐怖が、すべて殺意に変わっていた。

だが、?駆?はそれすらも看破し、嗤い、蔑み、嘲笑うだけ嘲笑い、消えていった。最後に、自分の姿をよく見ろ、と言い残して。

鏡をみて駆は絶句した。駆の腕には掻き毟った跡や噛みついた跡、カッターで斬りつけた跡がまざまざと残されていた。

自傷行為――――――結局、駆はそのまま気を失い、数日学校を

休む羽目になった。

それから、？駆？は何度も姿を現しては駆を嘲笑っていた。だが、時が過ぎるにつれてそれも日常の一部に変化していた。

「お前はもう、選ばれている……ね」

今朝耳にしたばかりの不吉な言葉。それが何を意味するのかは定かではないが、気を引き締めようと駆は思った。

「では、今日の授業はここまで。皆さん、お昼を楽しんでください」

「え？」

気づけば、授業は終わっていた。ポカンとする駆を余所に、クラスメート達は食堂に行ったり弁当を取り出したりしている。

「どうしたの？」

「美紀……じゃない、藤沢……悪い、後でノート貸してくれ」

美紀が近寄ってきて顔を覗き込むのを、駆は真っ青な顔でそんな事を呟いた。

「え……？　もしかして、ノート、取ってなかったとか……？」

「お願いします！」

唖然とする美紀に駆は土下座をするような勢いで懇願する。実際に土下座はしていないが、ここまで強く頭を下げたのは美紀も始め

て見る。

と、そこで美紀は朝や休み時間の会話を思い出し、一計を案じる事にした。

「ん～……いいけど、私に付き合ってくれる？」

「ああ！　ノートを貸してくれるんなら何でもする！」

「ふふっ、言ったね？　じゃあ、レッツゴー！」

ブンブンと音を立てて頷く駆には美紀のお尻から生えた悪魔の尻尾に気付かなかった。

美紀は鼻歌を歌いながら足取りも軽く何処かへと向かいだし、駆もそれにつき従う。

向かう先には、「食堂」の二文字があった。

＊　＊　＊

「どういう事だ……これは……？」

「どういう事って、皆でご飯食べようって話なんだけど？」

駆の疲れた声に、美紀は何でもない事のように返すが、駆と美紀

の正面に座る男子生徒と女子生徒は困惑を隠しきれないでいるのは明らかだった。

「み、美紀……？」

「なに？　朱莉」

駆をチラチラと見ながら美紀に恐る恐る話しかけたのは、古河朱莉（かり）。美紀とは一年からの友人であり、同じテニス部に所属している。

「いや……こいつ、あの静原だろ？」

「うん、そうだよ？」

やはり警戒気味で朱莉の言いたいことを引き継いだのは、棗暁彦（なつめあきひこ）である。はねた茶髪や白い歯、顔立ちもイケメンに入る部類だが、女性に対してだらしない（女好き、と言う意味において）事から残念なイケメンであると女子生徒からは言われている。

「えっと……本人の前で失礼かもだけど、いいのかな？」

「いーのいーの！だって駆、本当はすっごい寂しがり屋さんだから、こうして偶には一緒にいないと寂しくて死んじゃうんだから！」

「俺の性格を捏造するな！　ウサギだってそんな死に方はしないってのに、そんな理由で死んでたまるか！」

やはり恐る恐るといった風に駆を見る朱莉を見て、美紀が笑いながら駆をからかう。

不本意な評価をされ、気分を害した駆は素早く突っ込むと席を立つ。

「どこ行くの？」

「購買でパンを買って食べる。これ以上付き合ってられるか」

「……ノート」

不機嫌さを隠さずに歩き出そうとする駆に美紀はニヤニヤと笑いながら秘密のキーワードで対応する。

ビシリ、と音を立てて固まった駆を朱莉と暁彦が不思議そうに見る。

「ノート？」

「何の事だ？」

「それはね～、駆ったら……」

「言うなぁぁぁぁぁ！」

自分の醜態を曝け出すのを防ぐべく、駆は叫ぶが、時すでに遅し。

「ノートを取るのを忘れたから見せてくれって頼まれたの」

「ぐっ……言うなって言っただろう……」

「……」

早口で紡がれた真相に駆は恨めしげに美紀を睨むが、当の美紀はどこ吹く風で笑いを堪えており、残る二人は唖然とした表情で羞恥に震える駆を見つめていた。

「あ～……その、なんだ……忘れるからさ、気にすんな。な？」

「そ、そうですよ。ノートを取るのを忘れるなんて良くある事ですし……」

「慰めはいらない……ついでに敬語も」

気まずげに間を取り直そうとする朱莉と暁彦に、駆は歯を食いしばりながら悔しげに呟く。

が、最後だけは普段通りの口調で言う。もちろん、今も駆を恐る恐る見つめている朱莉に対してだ。

「お、そうか？　なら遠慮なく。よろしくな、駆」

「はい……じゃなかった、よろしく、駆君」

二カッと人懐っこい笑みで駆の手を握るのに対し、朱莉は先程よりは緩和されたがやはり遠慮がちに笑みを浮かべて頭を下げる。

こんな朱莉だが、美紀の話によると、テニスコートの中では普段からは想像できないくらい力強いプレーをするらしい。

本人は真っ赤になって否定していたが、美紀が笑いながらも真面目な口調で語っていたところを見ると本当の話なのだろう。

と、そこで暁彦が何かに気付いたかのように手を叩く。
「そういえば駆、お前、明日転校生が来るって聞いてないよな？　朝いなかったし」
「ああ……そういえば、同じクラスだったのか」
「そこかよ！？　まぁいいや、とにかくだな、転校生が来る。これは確実だ。で、肝心の性別だが……女だ」
暁彦は駆がクラスメイトの顔を覚えていなかったことに驚き呆れつつも話を戻し、秘密の話をするように囁いた。
「なんで分るんだ？」
「はぁ！？　転校生って言ったら女子であることが常識だろ！？」
「また暁彦君は……」
当然、とでも言うように胸を張る暁彦に朱莉が呆れて溜息を吐くが、駆の様子は違った。
「ああ、そういう事か。言いたいことは分かった」
「おっ、マジか？　じゃあどういうタイプだと思う……？」
「暁彦はともかく、駆まで……？」
ニヤリ、顔を見合わせる男二人に美紀は呆れを通り越して引いて

いて、朱莉もしょうがないですね、と言いたげな顔をしている。

「俺じゃない、アパートの隣の暇人が、こういうのが好きなだけだ……で、話を戻すが……っ」

「どうした！？」

「ちょっと駆、大丈夫！？」

話を続けようとした駆の頭に一瞬痛みが奔り、今朝見た夢の内容がフラッシュバックする。

額を抑えた駆に暁彦が取り乱し、美紀も駆の肩を掴む。

「大丈夫……ちょっとな。それで……」

「え？　おう……」

あっさりと元に戻った駆に拍子抜けしつつ、暁彦は何故か姿勢を正す。駆があまりに真面目な表情をしていたためだろう。

駆の脳裏に夢で見た少女の姿が映る。

「日本人離れした髪の色に、瞳。ソプラノの声に、どこか儚げで神聖な雰囲気のある……で、どうだ？」

「おお……で？　胸は？」

「さて……どうかな。比較したことがないから分らんが、大きい方じゃないか？」

「よしっ」

駆が挙げる条件（？）に暁彦は興奮し、逆に女子二人の視線は冷たさを増していく。

「ふ～ん……駆はそういう子が好みなんだ？」

「さぁ？　ただ適当に、思いついた事を羅列しただけだからな」

「日本人離れと言えば、駆君の髪も純粋な黒じゃないよね」

絶対零度の視線を向ける美紀に駆は白々しく答えるが、朱莉は駆の髪を見つめながら指摘する。

そう、駆の髪は純粋な黒ではなく、どこか赤みがかっていて、言うなれば黒紅色、と言うべき髪の色をしていた。

「そうだな。気にしたことは無いが、確かに。だからかもな」

「ふ～ん……」

髪を弄りながら呟く駆に美紀は未だに面白くなさそうな顔を向けるが、予鈴が鳴ると慌てて立ち上がり、三人を急かす。

「わっ！　もうこんな時間！　急がないと！」

「よし！」

「あわ……廊下は走っちゃ……」

「ばれない様に走れば問題ないさ、急げ！」

結局、駆達は三階にある自分達の教室に時間通りに到着できず、お叱りを受ける羽目になった。

＊　＊　＊

「ふぅ……」

下校時間となり、駆はアパートへ続く道をトボトボと歩いていた。

美紀と朱莉はテニス部、暁彦はサッカー部でそれぞれ部活動に勤しみ、特に何もない駆はこうして一人で帰っている訳なのだが、駆にとって憂鬱なのはそこではなく、帰った後に隣人（海猫）に絡まれる事だったりする。

今日は駆にとっては激動の一日であった。

美紀に引っ張られる形になったとはいえ、誰かと親しげに、まるで友達のように接するのは久しぶりだった。

駆自身浮かれているのは自覚できているが、それでも弾みがちな足を止める事は出来なかった。

だが、駆は忘れていた。朝の不吉な？預言？を。自分自身の歪ん

だ狂気の笑みを。

「……ッ！？」

交差点に差し掛かった時、駆の視界が歪む。三半規管を直接揺さぶられたかのような激しい揺れが眩暈や吐き気と共に襲い掛かり、脳裏に罅が入るような感覚が駆の身体を、意識を叩き潰す。

「う、うあぁぁぁぁぁっ！！」

絶叫と共に、駆の身体のどこかにあるブラックボックスが砕け散る音がした。

視界が暗転する。世界が、歪んで反転し、共鳴した。

＊　＊　＊

「ん……」

目が覚めたのは一秒後か、一時間後か、それすらもあやふやな感覚の中で駆は目を覚まし――――――絶句した。

「なっ……」

ビルに生えた捩れた家。街を彩るであろう花壇から生えた信号機。信号機から生え、絡みつく木。

「なんだ、ここは……」

知っている。夢の中で見た光景だ。だが、それだけではない。

郷愁……とでも言うのだろうか。懐かしさが駆の胸の内に広がる。

探していたものが、今も探し続けているものが見つかる気がした。

「ん……？」

人影が見えた。少女だ。

と、少女が気づいたのか、駆の方に振り向く。

真っ直ぐに駆を見つめるその少女は、夢の中の少女と同じ姿をしていた。

「君は……？」

「……」

少女と駆の距離は遠い。だが、何故か届くような気がしていた。

だが、手を伸ばすようなことはしなかった。いや、できなかったというべきか。夢の内容が頭をよぎったからかもしれない。

そのかわり、声を掛けた。距離が遠くても今だけは届くと確信していた。

「俺は……静原駆。君は……？」

「ごめんなさい……今は名乗れない。貴方なら、わかる？」

白藍の髪を靡かせ、少女が目を伏せる。駆としては名を知れない事は残念ではあったが、どこかでそうなのだろうと思っていたので、そのまま頷く。

「分かるよ……また、会った時に教えてくれ」

「……うん」

音叉を鳴らしたような音が世界を包む。

気づいた時には、少女の姿は何処にもなく、ただ静寂だけがあった。

だが、駆を支配していたのは先程とは違い、敵意だった。そこに誰がいるかなど、既に分かりきっている。

『よお、静原駆。とうとう迷い込んじまったな。いや、エラバレテイルのなら当然、か』

「お前が俺を此処に連れ込んだのか？」

『いいや、違う。……おいおい駆よ、駆さんよ。学習してないのかい？　俺はお前がＹｅｓと言ったらＮｏと返す。質問されたら聞き流す。そういう存在だぜ？　俺はお前に影響を与えない。お前がお前に影響を及ぼすだけさ』

?静原駆?は歪んだ笑みで駆を見据える。その瞳には様々な感情が入り乱れ、混沌に濁っていた。

『悪夢だと思うかい？　いいや、違うな。お前が望んだのさ。どういう意味か分かるだろう？』

「……ああ、そうだったな」

それは、夢の中の彼と同じセリフ。だが、此処から先は違う。

『お前が最後の?歪み共鳴する者(ディストーション・レゾナンサー)?だ。お前はこれからこの世界を出入りすることになる。逃げるなよ？　ま、その点に関しちゃ心配していない……お前が考えていた通り、サガシモノは此処にある。戦って、奪い取れ』

「……」

その言葉は何を意味しているのか、駆にはまだ分からない。だが、それでも駆は手を握り締めた。

?駆?はそれを見て愛おしげに嗤う。その瞳が喜色を帯び、歪んだ口元が三日月のように引き絞られる。

『さて、そろそろサヨウナラだ。精々これからをオタノシミニ』

?駆?気取った仕草で一礼すると、駆の視界が闇に包まれていく。抵抗することなく駆の意識は沈んでいった。

＊　＊　＊

「ん・・・んぅ・・・」

僅かな呻きと共に、駆は目を開ける。世界は果たして、元の姿を取り戻していた。

駆はあの世界に入る前と同じ交差点の横断歩道の前にいた。

信号が青に変わり、歩き始めた人々が駆を追い抜いていく。誰も、駆に気を配る事はしていない。

「……」

駆は携帯を開くと、時間を確認する。画面の右上には１６：５５と記されている。

駆があの歪んだ世界に入ってから一分一秒も変わっていない。

「戻ってきた……のか」

駆は呆然と今の状況を把握する。何が起こっていたのか、何が起きるかは分からずじまいだったが、駆は気にしなかった。

「……帰ろう」

あの少女に会えるのはきっとそう遠くないだろう……そんな予感が駆の脳裏によぎった。

そんな考えを振り切って前を向くと、信号は既に点滅を始めており、駆は早足を走りに変え、急いで横断歩道を渡る。

その、次第に小さくなっていく駆の姿を眺めている姿があった。

「……」

白藍色の髪に、瑠璃色の瞳の少女。

月の光ように儚げな、しかしどこか神聖な雰囲気を纏うその少女は、小さく息を吐くとその端整な顔に相応しい可憐な笑みを浮かべる。

彼女にとって、それは久しぶりのものだったが、彼女はそれに気づくことはなかった。

飽きもせず駆の姿を見続ける少女は、その後姿が見えなくなるまで見送っていた。

「静原駆……貴方が……選ばれた人……私と、同じ……」

小さく放たれた言葉は、誰の耳にも届くことは無く、ただ風に流されて消えていった。

第一話　自己像幻視の警告（後書き）

感想、ご指摘等お待ちしております。

これからもよろしくお願いします。

第二話　出逢い

駆が住んでいるアパートは外装は古い……というよりみすぼらしいものだが、中に関してはそうでもない。

２１世紀も既に半分近く、技術の進歩もそれなりにあったため、コンロは電気で動き、自家発電の装置も完備している。アパートの屋根には太陽光発電のパネルが設置されており、非常時にも対応できるようになっている。だが残念ながら、風呂だけが何故か無かった。

というのも、このアパートは何年もほったらかしにされていたものがベースになっており、風呂を新たに設置する事が出来ず、他を改装するのが精一杯だったらしい。

また、外装も管理人が「情緒があっていいじゃないか！」等といった趣旨の発言を熱心に語ったため、そのままにされていた。要するに、マニアだったのである。

ついでに家賃もあり得ない程安く、管理人曰く「道楽でやってる事だから」らしい。

そんな訳で駆は現在、アパートの近くにある銭湯に来ていた。

身体を洗い流し、湯船につかる。

「ふぅ……」

目を閉じて深呼吸をし、一日の疲れを取り除く。

だが、その心地よい時間はとある人物の闖入によって妨げられた。

「やあ、奇遇と言う程ではないけど、こんばんは」

「……海猫」

にやりと口元を歪める海猫に駆は嫌そうな顔をすると、すぐに表情を元に戻し、目を逸らす。

駆は海猫が苦手だが、それでいて不快感を感じず、何時の間にかペースを乱される事もあるこの男を気に入ってもいた。

苦手なのに気に入るというのもおかしな話だが、駆にとっては違和感も矛盾もない事実だった。

海猫薫（うみねこかおる）。二十歳後半程度の外見だが、年齢を聞いたことはない。

職業も不明で、ふらりと何処かへ行ったと思ったらいつの間にか帰ってきている。

性格に関しては完全に理解できない。恐らく、彼を理解できる人間はいないだろうと駆は断言できる。

几帳面かと思えば奔放で、不用心でありながら隙がなく、何も考えていない癖に賢者のような知識を見せる。

博愛主義者でありながら、万物に愛を向けず、平和を理想としながら災禍を好み、他者を虐げる事に悦びを感じるサディストながら、屈辱や暴力に悦んで身を差し出すマゾヒストでもある。

「なんだい駆君、僕をじっと見つめてさ。悪いけど、ソッチの趣味はねぇんだがな、あぁ？」

「変な事を言うな……俺にだってそんな趣味はないさ」

「大方、女の子の事でも考えていたんだろう？お盛んなのは結構だが、てめぇにゃ無理だろ？」

言いながら海猫は駆の肩に腕を絡める。駆はすぐにそれを振り払う。

「うるさい奴だな。どうだっていいだろう？」

「認めちゃいなよ、てめぇが人間不信だってよ」

「自覚してるさ、その位の事は。なんなんだ、一体」

面倒くさげにあしらう駆に海猫は何時になく喰いついてくる。

普段と違った様子にうんざりしつつも駆は海猫を睨む。海猫は意に介す様子もなく、ニヤニヤと笑いながら鋭い瞳で駆を見据える。

「な、なんだよ……」

「駆君、？自覚する？ことと？認める？はまるっきり違うものだよ。いいかい、自覚したところで意味はない。本人に如何にかする気がないのだからね。でも、？認める？は違う。認めれば変化が起こるのさ。それは世界を変えるほどに劇的なんだよ？」

「……すまん、言ってる意味が分からない。お前がいつにも増して真剣だってのは分かるけど」

暴言がとび出すこともなく、いきなり饒舌に話し始めた海猫に駆は困惑を隠せない。

だが、海猫は嬉しそうに頷くと自分に陶酔したかのように天井を仰ぐ。

「分からなくてもいいさ。でも覚えておくといい。それは本当に劇的だ。そう、雛(ひよこ)が？ぴよ？と鳴くのと、？ピヨ？と鳴くのとでは全然違うようにね」

「意味わからん。大体、それだって大した差はないじゃないか、馬鹿らしい。俺はもう行くぞ」

得意げに芝居がかった動きを見せる海猫に駆は呆れの溜息を浴びせると湯船から上がり、脱衣所へと消えていく。

振り返ることはなかったが、その表情は戸惑いに揺れていた。

海猫は湯船に浸かったまま目を閉じていたが、駆が出ていった事を確認すると口元を歪める。

「やれやれ、少し喋りすぎちゃったか……だが、思い通りだ。アイツは揺れている。だからこそ、選んだ価値がある。観察対象としちゃ十分さ」

口調が乱暴なものに変わり、目つきが鋭くなる。その瞳は、片目だけ金色に輝いていた。

「楽しませてくれよ？お前の歪みが、あの共鳴世界にどんな変化を齎すを、な」

暫く海猫は一人で悦に浸っていたが、やがて逆上せた為に風呂場から引きずり出されることになった。

＊　＊　＊

「やれやれ……」

結局、逆上せた海猫を抱えて帰る羽目になった駆はアパートの自室で深い溜息を吐いた。

駆は熱い風呂に入るとすぐに逆上せてしまうため、風呂には身体を洗う時間も合わせて十五分程度しか入らない。だからこそ、風呂に入り続けるなどという短絡な（あくまで彼にとって、だが）行動をした海猫に呆れていた。

だが、すぐにそれも馬鹿らしくなり、目を閉じる。

あの男の行動に意味を求める方が愚かだ、と自分に言い聞かせながら、駆はふと明日来るはずの転校生の事に思いを馳せた。

「転校生……か……」

それが、あの少女であったらいい、とらしくもない願望を抱きながら、駆は眠りに落ちていった。

＊　＊　＊

「ふぁ……」

翌日。

駆は一人で通学路を歩きながらこみ上げてくる欠伸を噛み殺していた。

駆の朝は早い。

洗濯物を洗濯機に突っ込み、朝食を作り、食事を終えたら軽い掃除、そして洗い終わった洗濯物を干し、何故か海猫の部屋に行って彼――――基本、海猫は鍵を開けっ放しで寝るため、楽に入れる――――を叩き起こし、その朝食を作る。

無論、使う食材は海猫の冷蔵庫から調達する。駆に作らせることに全く疑問を抱かない海猫は、何故か食材を揃える事は自分でやる。

その点を指摘すると、曰く、

「いやぁ、さすがに一人暮らしの高校生からお金を出せなんて言わないさ。一応、僕の食事だからね。半端者の作る手抜き料理だが、

最低限の礼儀ってのは払わねぇとな。感謝しろよ？」

などという殊勝なのか無礼なのか分からない言葉を吐かれた。

直後に食事を取り上げ、謝罪の言葉を引き出してその場を収めたのはいい思い出である。

ともあれ、こうして朝早起きするのが習慣となっている駆にとって、昨日のように起こされるという出来事は非常に稀だったりする。

「……」

思い出す内に腹が立ってきた駆だったが、考えても仕方がない。海猫はそういう人物なのだから。

怒りながら諦めるという奇妙な行動を心の内で成し遂げた駆は、朝から疲れながら校門をくぐる。

靴を履き替え、三階にある２－Ｂ教室に入る。

皆を遠ざけ、また遠ざけられている駆に対し、普段なら美紀以外のクラスメイト達は目を逸らすか、無視するかのどちらかだったのだが、今朝は少しだけ違った。

「駆ー！！　遅いぞ！」

「……何故俺の机に座る？　そして何故お前に早いか遅いかの判断をされなきゃいけないんだ、暁彦」

大声を張り上げる暁彦に駆は溜息を吐きながら降りるように促す。

暁彦はニッと笑うと素直に机から降り、駆の前の席の椅子に座ると、駆の方に向き直る。

「なんだよ、ダチにやるんだったら普通だぜ、このぐらい。」

「……そうだったか？」

何でもない事のように言う暁彦に、駆は頭を捻るも、そういった事をする人間はいなかったように思える。

「それよりさ、駆……」

「おはよう、駆、暁彦！」

「おはよう、駆君、暁彦君」

暁彦が輝いた顔で何か言いかけたが、それを二つの声が遮る。

振り向くと、テニス部の朝練が終わったのだろう、美紀と朱莉が近寄ってきていた。

「おはよう、朝練、ご苦労様」

「オッス！　今駆とも話そうかと思ってたんだけどよ、今日が何の日か、覚えてるだろ？」

言葉少なに挨拶を返す駆とは違い、暁彦は未だ興奮した様子で二人を見回す。

「はいはい、昨日の今日で忘れないわよ。転校生でしょ？」

「それだけではないっ！！　我が親友、駆の言っていた通りの美少女が来るかもしれないんだ！」

「だから、アレは妄言の範囲だろう……それに、俺は何時からお前の親友になった？」

呆れて朱莉と目を合わせながら嘆息する美紀に、暁彦は目を輝かせて反論する。

駆もまた、呆れた表情で暁彦を見るが、暁彦はどこ吹く風だ。

「おいおい、駆と俺は昨日の時点で親友となったのは明白……おっと、先生が来た」

「暁彦は、もう……でも、良かったじゃない、駆」

呆れつつもどこか嬉しそうに微笑む美紀に駆は渋面を見せる。

「どうだかな。要らん騒動に巻き込まれる気がする……それより、お前らも早く席に着けよ」

「あはは……駆君、辛辣なんだね。でも美紀、駆君の言うとおり、早くしないと」

そっぽを向きながら冷めた口調の駆に苦笑しつつ、朱莉も美紀を急かす。

美紀も苦笑しつつ、早足で自分の席に戻る。

直後に担任の教師である女性、篠原美加(しのはらみか)が入り、クラスの全員が静かに自分を見据えている事に目を見開いて驚きを表現すると、全員を見回して口を開く。

「……昨日言った通り、今日からこのクラスに転校生が入ります。皆さん、仲良くしてくださいね？」

「……」

クラスの全員が扉に注目する。駆も今回ばかりはその流れに従っていた。

扉がゆっくりと開き、女生徒が入ってくる。

「あっ……」

小声で声を出したのは誰だったか。美紀か暁彦か、それとも朱莉か。もしかしたら駆だったのかもしれず、それ以外の誰かだったのかもしれない。

誰もがその少女を見て驚いていた。正確に言えば、その容姿にである。

透けるような白い肌、日本人離れした白藍色の髪に瑠璃色の瞳、どこか儚げで神聖な雰囲気を持つ少女に、クラスの全員が見惚れていた。

驚きの表情で振り返り、駆を見る美紀や暁彦、朱莉に駆は少しだけ苦笑すると、すぐに少女に視線を戻す。

どこか浮ついた様子のクラスに構わず、少女が黒板に自らの名前を書いていく。書き終わると、少女は静かに振り向いた。

「……御堂奏（みどうかなで）です。よろしくお願いします」

「……」

紡がれた美しいソプラノの声にも、誰も反応できなかった。

「そ、それでは……御堂さん、空いている一番後ろの席、静原君の隣ですね。そこに座ってください」

「はい」

慌てて席を指し示す篠原教諭に奏は頷くと、優雅な足取りで席に向かい、座る。その際、少しだけ駆に視線を向けると、微笑んだ。

駆も常と変らぬ無表情ながらも目礼を返し、篠原教諭が連絡事項を話し始めると前を向く。

連絡事項はそれほど多くはなく、すぐにホームルームは終わり、篠原教諭が出ていった後のクラスメイト達の興味は既に転校生に向いていた。

が、クラスメイト達の動きは転校生の少女———奏自身によって止められた。

「静原駆君……ですよね？」

「ああ。あんたの名前は今聞いた。御堂奏っていうのか」

奏は駆の方に身体ごと向いているが、駆は視線を動かすだけ。だが、それに不快感を示すことなく奏は微笑む。

「はい」

「……昨日、君と会ったのは、間違いじゃない？」

「ええ」

あんた、と不遜な呼び方をしたにも拘らず、微笑を崩さない奏に駆は毒気を抜かれ、思わず慣れない二人称で呼んでしまう。

それにも頷いた奏にクラスメイト達はどよめく。

何度も言うが、駆の交友関係は広くない。と言うより、一部の例外を除いて皆無に等しかったのだ。駆が自分から交友関係を広げようとしない事もあり、駆の立場は「友達のいない根暗なヤツ」といった評価だった。

クラスメイト達はそれを知っており、だからこそ、昨日という短い時間の接触でありながら、奏と親しげに（彼らから見て）話す駆に驚きを禁じ得なかったのだ。

と、そこでようやく呆然自失の硬直から立ち直った美紀が駆に詰め寄る。

「駆、御堂さんと会ったの？」

「ああ、昨日、帰り道でな」

「はい、少しだけでしたけど。編入する前に、この学校を一度見ておきたかったものですから。静原君とは、その時に」

素っ気なく簡潔に答える駆と違い、奏は至極丁寧な口調で補足する。

勿論、嘘である。

確かに会ってはいるが、顔を合わせただけで話などしていない。そして、そもそも会ったのは街中ですらない。

駆のあまりに簡潔すぎる説明では、通りがかりの人と話しただけと思われてしまう。だからこそ、奏は捕捉を入れたのだろう。

「ふーん……？」

「なんだその目は……？　俺は何もしてないぞ」

「えっと……駆君、美紀が気にしてるのはそうじゃなくて、御堂さんが、昨日駆君が予想したのと一緒だった事だよ」

半眼で睨む美紀に駆が肩を竦めると、朱莉が苦笑し、フォローを入れる。

「何か、あったんですか？」

「いや、何があった訳でも――――――」

「ああ、実はな、昨日、転校生がどんな奴かって予想をしたんだけど、駆が予想したのが御堂さんそっくりだったんだよ」

不思議そうに首を傾げる奏に駆は何でもないと首を振るが、その途中で暁彦が割り込み、あっさりとばらす。

「え……？」

「だから、適当に言っただけだと何度言わせる？　というか、何時までも人の席の周りで騒ぐな、鬱陶しい」

ポカンとする奏を視線の奥で捉えつつ、駆は普段より一層冷えた声で、騒ぎ始めた周りに言い放つ。

クラスの空気は、それだけで凍った。

「お、おい駆、今のはまずいって。
そりゃ、俺も悪かったけどさ……」

「そうだよ、駆。何もこんな時まで……」

さすがに、周囲の視線が厳しくなり、悪意が駆に向いた事が分かったのだろう、暁彦が慌てて止めに入る。

美紀も朱莉と共に駆に詰め寄ろうとするクラスメイトを抑えている。

「お前の事は言ってないさ。そういう風になってしまったのは俺の責任がある事も理解している。
だが、周りの連中はただ興味を持ったものに群がっているだけだ

ろう？
そんな奴らに俺の日常を壊されたくない」
「か、駆……」
不審、疑念、値踏み……おおよそ人に向けることを憚るような視線を、駆は躊躇うことなく周囲に向ける。
絶対零度と言っても遜色ない程の冷たさを持ったその視線に、偶々その目を合わせてしまった生徒は一歩、二歩と後ずさる。
険悪な空気が流れ、一触即発と言えるまでに広がった悪意の視線の応酬は、その場に即さない程美しいソプラノの声に遮られた。
「やめてください……これ以上は、もう。
申し訳ありませんが、ここは席に戻っていただけないでしょうか？
静原君も……ごめんなさい。私の所為で……」
「そ、そんな、御堂さんが謝る事じゃないよ。
元々、私達が騒いじゃったんだし……」
目を伏せ、申し訳なさそうに俯く奏に、意外にも朱莉がフォローの声を掛ける。
一方、謝罪を向けられた駆は、舌打ちをしながら渋々戻っていく生徒を冷めた目で睨んだ後、奏に目を向ける。
「こっちこそ……悪かった。御堂の気を煩わせるべきじゃなかった」
「いえ、良いんです。こちらこそ、本当にすいませんでした……」

どちらも自分が悪いと譲らない。
やがて、自分達が不毛な謝罪の応酬をしている事に気づき、二人は目を合わせると、奏は微笑み、駆はバツが悪そうに眼を逸らすという正反対の行動に出ることになった。
丁度その時、授業開始の号令と共に教師が入ってくる。
駆と奏は前を向き、授業に備えた。
『やれやれ、お前は何時もそうだな？』
「……」
聞こえてきた声に、窓に目を遣ると、？駆？が映っていた。
授業中で反応出来ない駆を、愉悦の瞳で見つめ、嘲る。
『お前は他人を信じないのではなく、自分を信じていないだけだろう？
壊れるのが怖いから、壊されるのが怖いから、敵を作る振りをして逃げている。
本当は一人になんかなりたくない癖に』
「……っ」
『ま、だからこそお前はエラバレタんだが。
そうやって逃げ続けて、待っているものは何だろうな？』

駆が言い返せない事をいいことに、？駆？は嗤う。

『試練は待ってはくれないぜ？　モタモタしてると、俺が――――――』

「静原君？　当てられてますよ？」

「……え」

隣からの声に？駆？が我に返ると、奏が心配そうに覗き込んでいた。

？駆？の姿は既に消えている。どうやら、周りからは長時間呆けていたように見られていたらしい。

その証拠に、隠しきれていない嘲笑が耳に入ってくる。

それが先程の？駆？の嘲笑と重なり、駆の苛立ちが増していく。

「……分かりません」

「そうか、では……」

教師は淡々と次の生徒を指名し、その場を流す。

教室に蔓延する悪意には反応せず、そのまま授業が続く。

駆の中の違和感は大きくなり、視界が揺れ、吐き気が襲う。

「うっ……」

小さく呻く駆に誰も注意を払うことは無く、ただ普段通りの日常がそこにある。

だが、駆の意識はずれ始め、ある筈のない世界が重なっていくのが理解(わか)る。

視界の暗転が始まり、駆の中にあるナニカが、重なり始めた世界と共鳴し、蠢き始める。

「う、ぁ――――――」

「ダメです。今は」

堕ちる――――――その感覚は、冷たいものに遮られる。脱力し、垂れ下がった手を、奏がほんの少しだけ、握っていた。

身体を奔る怖気が引いていき、濁った意識が明瞭になってくのを駆は感じていた。

何故か、安心する。

「落ち着いて、世界を感じて。まだ、静原君はあの世界を歩くのに馴染みきってません。静原君には時間が必要です。だから、自分をしっかり持って」

「あ、あぁ……」

謎めいた言葉を、周りに聞こえない様に小さい声で囁きながら、奏は握る手の力を強くする。

駆は大きく息を吸い、吐く。深呼吸を繰り返し、身体中に酸素を送るようにイメージする。ようやく全身に力が戻り、最後に一つ、小さく息を吐くと、駆の意識は完全に覚醒し、不快な感覚も消えた。

「ありがとう、で、いいのか……？
でも御堂、お前は、一体何を知ってるんだ……？」

「……ごめんなさい、此処では、話せることも話せません。時が来れば、ちゃんと話します。だから、あと数日は、今の感覚を忘れないでいてください」

「……？」

駆の訝しげな視線を受け、奏は小さく首を振ると真っ直ぐに駆を見据える。

謎めいた言い様に駆は眉をひそめるも、奏がどういった方法でか、駆の意識を呼び戻したのは事実で、駆の知らない何かを知っているのもまた事実。

話せないと言う奏に、駆の中で疑念が湧くが、それを押し殺して奏の瞳を見据える。宝石を思わせる瑠璃色の瞳には一点の曇りもなく、寧ろ純粋な好意と言う輝きが宿っているように思える。

吸い込まれそうな程無垢な瞳に、駆は一瞬だけ疑念を忘れ、見惚れる。

少なくとも、駆を謀ろうとする悪意は見えなかった。その事に小さく溜息を吐き、駆は先程とは違う意味でその眼差しを向ける。

「……少なくとも、御堂が俺を騙そうとするつもりが無いのは、まぁ、分かった。それから、嘘を吐くつもりがないことも。
でも、俺は何も分からない。話してくれるまで、完全な信用なんて出来ない。悪いけどな」

言いながら、駆は自己嫌悪に陥っていた。

何が、話してくれるまで完全には信用できない、なのだろう。

奏は嘘を吐かないと分かり、更に念を押されているのに、駆はそれを本心から信じられない。いや、本当に信じられないのは、信じたいと願う自分そのものだ。信用したいのに、いつか裏切られるという思いが邪魔をする。

どうしようもない程臆病風を吹かせる自分の心に、駆はうんざりしていた。

「はい、分かっています。でも……私は、静原君と仲良くしたいですよ」

「は？」

心中で自嘲する駆は、告げられたある意味場違いな言葉に言葉を失う。いきなり何を言い出すのだろうか、この少女は。

大体、駆は面と向かって信じられないと告げているのに、奏は微笑みを崩さぬまま仲良くしたいと言い出す。再び訝しげな視線を向けてしまう駆に、奏は笑みを深くする。

だが、駆は別の、ある事に気付いた。奏の目だ。顔だけなら笑みを浮かべているが、その目には不安そうな光が宿っている。いや、不安だけではなく、ほんの僅かな、一見しただけでは分からない程小さい怯えの色。

その理由が分からず、駆は混乱する。駆から見た奏の第一印象は、至極丁寧な物腰で、摩擦など起こさず、誰とでも仲良くなれるような人間だ。

その彼女が、駆のような人間を相手にするのに、どういう事か不安を覚えている。それも、拒絶されるのではないか、という、どちらかと言うと駆が抱く筈の感情で。

「だめ……ですか？」

「……」

奏の不安の色が濃くなる。ここでようやく、駆は理解した。

駆の信用できない、と言う言葉を、奏は言葉通りに信じているのだ。故に、仲良くしたい――――――友達になりたいという要望に対し、駆に拒絶される事を恐れている。

なんて綺麗で純粋な子だろう、と駆は考えてしまった。外見の事ではなく、内面の話だ。

駆にとって、本当に信用できないのは自身を渦巻く状況と、何も分からない癖に、奏を盾にして言い訳をする自分自身だ。だから、ただあの世界で出逢っただけの奏には何の落ち度もなく、不安がる必要もない。

それなのに、奏は自分が話さない事で、駆の信用が得られない、友人として接する事が出来ないのではないかと恐れ、怯えてしまっている。

駆は、しっかりと奏の目を見つめた。

「悪い、俺の言い方が悪かった。その内、聞かせてくれ。教えてくれるんだろ？　俺の身に何が起こっているのか」

「あ、はい。それは、間違いなく」

急に真剣な顔になった駆に奏はあたふたとすると、駆の目を見つめる。その瞳には、若干の期待があった。

「えっと……その、お前の事は、どうしてか分からないけど、信じてもいいかなって思うんだ。あの世界の事とか、関係なしに。だから、少し、踏み出してもいいと思った」

「はぁ……」

目を逸らしつつ、早口の駆に奏は不思議そうな顔を向ける。何が言いたいのか要領を得ないのだろう。

それはそうだ。駆のそれは殆ど独白のようなものなのだから。

信じてもいい。信じられる。そう思ったのは本当で、もしかすると、あの夢を見た時からそう思っていたのかもしれない。

少なくとも、あの世界の事や、其処に佇んでいた奏の事は不審の

要因となる。だが、駆は何故か、奏に疑念や不審を向けたくなかった。

駆にとって、誰かを信用するのは難しい。心の奥底で、何を考えているか分からないもの達をどうやって信用しろというのだろう？

それが、駆の言い分だった。

だが、そもそも信用しなければ、人間関係など作れるはずもない。奏は、両親とは違う。駆の信頼を裏切った両親とは違うのだ。

「ま……これからもよろしく、御堂」

「はい！」

あくまでも小声で、教科書で顔を隠しながら、駆と奏は笑いあう。丁度授業が終わり、挨拶もそこそこに教師が出ていく。

まったくノートを取っていなかった事に二人は顔を見合わせると、今度は苦笑を交わしあった。

＊　＊　＊

「駆、これから、暇か？」

「いや、バイトが入ってる。どうした、急に？」

放課後になり、駆が帰る準備を整えていると、暁彦が話しかけてくる。結局、暁彦は朝の一件については言及してこなかった。寧ろ、駆を変に気遣う事もなく、普通に接し続けていた。曰く、

「親友だって、昨日も今日も言ったろ？　昨日話しただけだけど、お前は面白い奴だからな。逃すのは惜しいさ」

らしい。遠慮も何もない言い方だが、返って駆にはそれが心地よかった。

「え、駆、バイトなんてしてたの？　どこで？」

「美紀、知らないの？
幼馴染だっていうから、知ってるんだと思ってた」

近寄ってきた美紀が驚いたように駆を見る。その反応に、駆どころか朱莉も不思議そうに美紀を見る。

「知らない知らない！　だって駆ってば、そんな事一言も言わなかったもん！
駆、どこでやってんの！？」

「小さい喫茶店だよ。大体、お前は言ったら告げ口するだろ？
時間ないから、もう行くぞ！」

驚いたように首を振る美紀に、駆は時間を確認しつつ走る。後ろから何か言っているのが聞こえたが、無視し、駆はスピードを上げた。

＊　＊　＊

「追いかけようぜ？」

「え？」

走り去る駆を見ながらニヤリと笑う暁彦に美紀と朱莉は訝しげな視線を向ける。

暁彦はなにを言ってるんだ、と呆れの眼差しを向け、口を開きつつ走り出す。それに釣られる形で、美紀たちも走り出した。

「御堂さんも誘ってさ、歓迎会するんだよ。アイツのバイト先で、な」

「私がどうかしましたか？」

「うわ、御堂さん！？」

昇降口に行くと、丁度奏が帰ろうとしている所だった。不思議そうに美紀たちを見つめ、チラチラと後ろへ目を向けている。

「これから駆のバイト先に行くんだけどさ、御堂さんもどうよ？」

「静原君の……？　迷惑じゃないでしょうか？」

「大丈夫！　アイツは友達を邪険にする奴ではないと信じている！」

困惑する奏に、暁彦は何故か自慢げに胸を張る。後ろから美紀と朱莉がジト目を向けていたが、気付くことは無かった。

「じゃあ……ご一緒させていただきます」

「そうこなくっちゃな！！
よし、行こうぜ！」

「……駆君、もう見えないよ？」

頷いた奏に満足そうにする暁彦だが、朱莉は既に追いかける事を諦めたように溜息を吐く。

「えっと……静原君なら、向こうに行きましたよ？　行きましょう」

校門を出た辺りで、奏はある方向に指を指し、その方向に向かって、迷いのない足取りで歩き出す。まるで行先を知っているかのような奏に美紀達は驚きの眼差しを向ける。

「え、御堂さん、駆のアルバイト先、知ってるの？」

「いえ、そういう訳では……ただ、勘です」

信じられない、と言うように美紀が目を見張らせるのを、奏は僅かに振り返り、悪戯っぽい笑みを浮かべる。

「藤沢、御堂は今日転校して来たばっかだぞ？
お前ですら知らないのに、御堂が知ってる訳ないだろ？」

「あはは、そうなんだけど……でも御堂さん、結構確信があるみたいな感じだし」

呆れた顔で当たり前のことを言う暁彦に、美紀はバツの悪そうな顔で苦笑する。確かにそれはその通りなのだが、奏の様子を見ていると、本当に知っているのではないかと思ってしまう。今も奏は美紀達を振り返りながら微笑を浮かべており、どこか神秘性のある雰囲気と相まって、まるで妖精に導かれているような気分になってしまう。

「でも、確かにそうかも。御堂さん、不思議な感じがするから。妖精とか、本当にいたら、こんな感じかなって思うな」

美紀が今まさに考えていた事を朱莉が口に出す。奏はそれには答えずに、意味深に見える笑みを浮かべるだけだった。

何となく、何も話す気がなくなり、無言で歩き続けていると、突然奏が足を止め、横にある建物を見つめる。

「多分、此処ではないでしょうか。小さいですが、喫茶店なのは間違いなさそうですし」

ｏｐｅｎの札が掛かった扉を見て、奏は振り返り、頷く。店の看板には「Ｆｉｒｍａｍｅｎｔ（蒼穹）」の文字が大きく描かれている。

一同は顔を見合わせると目配せしあい、奏が最初に踏み出す。

ドアを開けると、チリン、と鈴が軽やかな音を立てた。

「いらっしゃいませ、ご来店ありがとうございます。４名様———

――――」

「静原君、こんにちは。お邪魔しますね？」

これまでの表情と違い、完璧な笑顔で出迎えた駆の言葉は途中で消え、驚愕が顔に張り付く。

「あ、駆！　来たよー。
いい雰囲気の店だね」

「へへっ邪魔するぜ？」

「こんにちは、駆君。突然でごめんね？」

「――――――」

美紀、暁彦、朱莉の三者三様の挨拶に、駆は表情を強張らせたまま硬直し、暫く客である４人を見つめていた。

「おーい、駆。バイト中なんだろ？
立ってるのもアレだから、席に案内してくれよ」

「っ！！　あ、ああ、わる……じゃない、失礼しました、お客様。
では、此方にどうぞ」

ニヤニヤと笑いながら催促する暁彦に、駆は一瞬険しい表情を浮かべるも、仕事中である事を思い出したのか、再び笑顔を取り繕い、席へと案内する。

「悪いことをしてしまったでしょうか……」

「ううん、アレ、照れてるだけ。駆ってば、他人に対して変な方向に壁造るから、分かりにくいけどね」

ひそひそと美紀の耳元で申し訳なさそうに囁く奏に、美紀は安心させるように笑う。

駆の分かりにくい感情の変化を、美紀は完璧に捉えていた。駆とは暫くは疎遠になっていた美紀だが、駆の感情を読むという点において、美紀は誰よりも自信があった。

「そうですか……」

「そうそう。あんまり、悪く思わないであげて？
駆、怖がりなだけだから」

「ええ、それは勿論です」

片目を瞑り、悪戯じみた笑みを浮かべた美紀に、奏はしっかりと、頷いた。迷いのないその動作に、美紀は内心で驚くとともに少しだけ安心してしまった。

ありがとう、そう言おうとしたところで、大きな声がそれを遮る。

「おーい、二人とも！！　突っ立ってないで、早く座れよ！
注文して、駆を困らせらんねぇだろ！？」

「だ、駄目だよ暁彦君！！
駆君、ごめんね？」

「いえ、謝る必要はありませんよ、お客様。こういった輩を相手取るのも、仕事の内に入っていますから」

「な！？　何をするんだ駆！　ちょ、まっ……財布から金を抜くな！

うおっ！？　何故服を……ぎゃあぁぁぁぁぁ！！」

なにやら大騒ぎとなっているテーブルを暫し呆然と眺め、奏と美紀は顔を見合わせると、お互いに困った顔で笑いあう。

「……行きましょうか。静原君を止めてあげないと、棗君が可哀想です」

「自業自得だから、この際放っておきましょう？

私達は楽しんでればいいわ」

苦笑して歩き出す奏に、美紀は呆れたように告げるとテーブルに向かう。

そこには駆と暁彦が掴みあっており、朱莉が止めようと慌て、店長だろうか、やたら渋い声が駆に苦笑交じりで働け、と告げる。

奏が駆の腕を掴み、止めるよう言うと、駆はあっさりと手を離す。が、その手に千円札が三枚ほど握られていた。それを駆は何食わぬ顔でレジへと持っていく。

暁彦の嘆きの声を上げる中、すれ違いざまに美紀が声を掛ける。

「これから、賑やかになるね」

「どうだかな。すぐに離れていくんじゃないか？」

澄ました顔で本心を語る幼馴染に、本当に捻じ曲がって育ったものだ、と思いながら美紀は苦笑する。

願わくば、この不器用な幼馴染が心から信頼できる人が現れますように、と美紀は心中で祈った。

その脳裏に、出逢って間もない少女が浮かぶのを自覚しつつ、その祈りの人物が自分でありますように、と願いながら。

第二話　出逢い（後書き）

感想、ご指摘受け付けております。

第三話　Who killed Cock Robin？

「うげ……結局、持ってった分喰わされた……ついでに喰われた……」

重々しい溜息を吐き、腹を押さえる暁彦に、駆は冷たい視線を向ける。

「お前が悪い。人をからかおうとするからそうなるんだ」

「だからって三千円持ってくことはねぇだろ……？

アレ、全財産なんだぞ？」

「いいことあるといいな」

「反省なしか！？」

あくまでも悪びれない駆に暁彦は目を吊り上げる。とはいえ、店で散々騒いでしまったのもまた事実。駆も交じっていたような気もしないでもないが、迷惑をかけた事には変わりない。

暁彦はバツの悪い様子で手を合わせる。

「ま、騒いだのは悪かったよ。お詫びに、お前の家でも寄らせてくれ」

「暁彦、それお詫びになってないわよ……って、そう言えば。

駆、今どこに住んでるの？」

「知らないのですか？」

美紀は暁彦の若干厚かましい要望に嘆息し、ふと気づいたように駆に向き直る。

そこから発せられた問いに、奏は目を丸くする。

駆と美紀が幼馴染であるという事は既に聞いていた。しかし、その住んでいる家を知らないというのはおかしい気がする。

無論、家が隣同士というだけでなく、離れていても幼い頃から一緒にいれば、それは幼馴染にカテゴリーされるものだが、一回くらいは家に行った事はあるだろう。

「それが、駆ってば今一人暮らしで、どこに住んでるかも教えてくれないんだよ」

「んー、でも、男の子だから、あんまり教えたくないんじゃない？」

「……」

非難するように駆を見る美紀に、朱莉はもっともらしく、したり顔でのたまう。

僅かに笑いが起こる中、駆は一人、不機嫌な面持ちで黙り込む。

「駆、どうした？」

「あ……」

駆の異変に気づき、暁彦か訝しげな視線を向ける。美紀はハッと目を見開くと、落ち込んだ様相で目を伏せる。

「か、駆、ごめん！　で、でも……」

「美紀、どうしたの！？」

「……俺、こっちだから。じゃあな」

慌てだした美紀に朱莉が困惑の声を上げる。

駆はそれを無視すると、先程までとは違う、冷たく罅割れた声色で短く吐き捨てると、先にある曲がり角を曲がり、消える。

僅かに見えた横顔は何処か苦痛に歪められているように見えた。

「……静原君、どうかしたのでしょうか？」

「いきなり変になったよな。どういう事だ、藤沢？」

「美紀、何か知ってるの？」

ぽつり、と奏が疑問を投じるのを合図に、暁彦と朱莉は次々に美紀に問いを浴びせる。

問われた方の美紀としては困るより反応のしようがない。この件に関しては完全にプライベートな話で、駆が話していない以上、話すわけにはいかない。

しかしながら、このメンバーで行動し始めて時間が立っている訳

でもないが、美紀としてはこの三人の事は友人として捉えており、できれば話したいとも思ってしまう。

「ごめん、詳しくは話せないんだけど……」

「構いません。あの、静原君の気分を害してしまうのを承知ですので、聞かせていただけませんか？　やはり、心配ですから」

「そうそう、なんてったって、友達だからな」

言葉を濁す美紀に、奏が喰いつく。毅然とした態度に美紀は内心の驚きを表に出すところだったが、その寸前で暁彦の軽口じみた科白で堪える。

とはいえ、暁彦の科白は口調こそ軽口じみてはいるが、そこに込められたものは真剣そのものである。一方、何も言わなかった朱莉もまた、若干の抵抗を示しつつもその目で『聞かせてほしい』と訴えていた。

その視線に見据えられ、美紀は心の中で嘆息する。

駆は、幸せ者だ。交流を持って日も浅く、奏に至ってはほんの数時間程の関係だ。しかし、そんな事に関係なく、駆を案じてくれる。

駆は気づいているのだろうか？

先程までの「Ｆｉｒｍａｍｅｎｔ」で過ごした時間、駆は終始笑顔だった。それは間違いなく、駆が楽しみを見出していた事を示している。

きっと、大丈夫。駆が知れば、「勝手に話すなよ、藤沢。口が軽い女はすぐに禿るぞ？」などと暴言を吐かれるだろうが、今を逃せば駆が他人に心を開くことなど永遠に無くなってしまう気がする。

美紀は覚悟を決めた。

「……駆ね、親と喧嘩してるの。それも、中学二年の終わり頃からずっとで、それから駆、今みたいに人を遠ざけるようになって……私も今まで、名前じゃなくて名字で呼ばれてたぐらい。

まともに話したの、最近なんだ」

「おいおい……中学二年って言ったら、二年も前だろ？今年で三年目って事じゃん？　そんなにヤバい事やったのか？」

驚愕を隠さずに大袈裟な様子で首を振る暁彦に、美紀は辛そうに笑う。

「ううん、駆は何もしてないけど、おじさんとおばさんが、ね……。でも、どっちが悪い訳じゃないの。ただ、意見の擦れ違いが大きかっただけで……」

「そっか……大変なんだね、駆君も……」

はっきりとは口にせず、複雑な面持ちで笑う美紀に、朱莉はしみじみと呟く。

朱莉や暁彦にとって、静原駆はあまり接点のない存在だった。成績が優秀なのは提示される上位三十名の名簿で毎回載っていたので知ってはいたが、それ以外は特に気に留めるような人物でもなかった。

それこそ、噂で囁かれていた「友達のいない根暗なヤツ」という認識そのものだった。

しかし、実際に話してみると、意外にも気兼ねなく話せる。少なくとも、人柄に問題があるように見えなかった。

「人を遠ざけるっていうのは、もしかしなくても今日のアレだろ？」

「うん……」

辛辣、と言うには棘のあり過ぎる言葉の数々に、他人のそれを上回るほどの悪意に満ちた視線。

遠ざけているというより、人間不信のようにも思える。

それはあながち間違いではないが、朱莉達にそれを知る術はなかった。

「……だから、なのですね。だから静原君は、選ばれた……。

諍いからの不信で他人を拒絶する、それが、静原君の……」

「御堂さん？」

暗い雰囲気が美紀達を覆う中、奏だけが一人、納得したように頷いている。

ブツブツと呟く奏に、美紀が訝しげな視線を向ける。

「だとしたら、あの世界で与えられる静原君の力は――――――」

「御堂さん？　どうかした？」

「えっ！？　ああ、いえ、何でもありません。その、私、少し様子を見てきましょうか？

今なら追いつけると思いますし、静原君、気分が悪そうでしたから……」

考え込んでいた奏は、掛けられた声にハッとすると目を瞬かせ、取り繕うように笑う。

奏としては様子を見るというのも目的だが、駆を見極めるという目的もある。

奏にとって、駆は未知数の存在だ。

人を試すようなあの世界で、闘争本能を刺激されない者はいない。少なくとも、現実（あの世界も現実ではあるのだが）よりも凶暴になる事は間違いない。

しかし、駆に対してはそれが無かった。

初めて会った時、駆の周囲には隠しきれない違和感があった。まるで、隣にもう一人の駆がいるかのような、存在が二つあるのに無理に一つに見せているような、そんな違和感。その気配は混じり合うように動きつつ、反発しあっているかのように蠢いていた。

その所為かは分からないが、闘争本能をフィルターで薄めているような感覚がしていたのだ。

それを、見極めたい。

そんな思惑を隠して美紀を見つめると、美紀は僅かに苦笑して頷いた。

「ごめん、お願いしていいかな？　私が行っても、多分駄目だろうし……駆の事、心配してくれてありがとね」

「え？　……あ、はい。その、友達ですから。

で、では、行ってきます！」

美紀から放たれた申し訳なさそうな一言に奏は一瞬、自分が何をしようとしているのか忘れてしまった。時間にして一秒にも満たない自失から帰還すると、奏は慌てて頷く。

若干挙動不審になっているのを自覚しつつ、奏は走り出す。後ろで美紀たちが不思議そうにしているのを視線で感じながら、奏は駆が消えた路地へと足を進めた。

友達。駆は、友達。友達を心配するのは当然。

奏にとって、それは馴染のないものだった。これまで何処にも、彼女にそんな居場所はなかった。だから、初めての事に戸惑いを覚えてしまう。

奏は、駆を心配して、その様子を見たいのか、見極めという目的を果たしたいのか分からなくなってしまった。

両方であるなどという、当たり前のような欲張りに、奏は最後まで気づかなかった。

＊　＊　＊

「はぁ、はぁ……」

駆は道の真ん中で蹲っていた。

どうしようもなく震える身体を必死に支え、吐き気を我慢する。

美紀が一人暮らしの件を持ち出した時、思い出してしまった。

両親との喧嘩の末の、冷戦というのも馬鹿馬鹿しい程冷え切った関係。現実から乖離したかのような曖昧な日々。

そして、考えてしまった。

住処を言えば、美紀はあの連中に自分の居場所を伝える。そうすれば、あの連中は飛んでくるだろう。見たくもない顔で、聞きたくない声で罵るだろう――――――と。

嫌だ。それだけは嫌だ。否定されたくない。自分を裏切ったあの連中にだけは、何も言われたくない。何かを言われることが許せない――――――！

嫌だ嫌だいやだイヤダイヤダイヤダ

来るなくるなクルナクルナクルナクルナ

オレノメノマエカラ、シカイカラ、ニンシキカラキエウセロ――――――！！

頭の奥底に浮かぶ言葉が意味のない音に変わっていく。

悪寒は限界まで迫り、這いつくばるしかできなくなった駆の目に、同じ学校の制服が映る。

『ようやくお目覚めかい？　随分かかったな。駆、そろそろ認めろ。お前が今感じているのは不快感ではない。お前の中にある衝動、歪みが目覚める。？歪み共鳴する者？としての力。名前のない誰かに与えられるヴォーパルの剣。

拒絶できない拒絶なんて、実にお前らしいだろう？いや、俺らしいと言った方がいいか？』

？静原駆？がそこにいた。口元を三日月のように歪め、愛しさを含んだ眼で嗤っている。

頭上から聞こえる声に、駆の不快感が増していくが、それは昼間のように堕ちるような感覚ではなく、単純に身体の中を掻き混ぜられているような、そんな不快感だった。

「お前……何を、言って……」

『何を言っているか？　おいおい、あんまり笑わせないでくれよ。お前の事を言ってるんだ。静原駆、お前の事を……そして、俺の事をな』

何も分からない。こいつは何を言っている？　こいつは何を知っている？　目の前にいる、コイツは誰だ？

駆は熱に浮かされたような頭で必死に考えながら声を絞り出した。

「お前は……誰だ。お前は、まさか、本当に――――――」

『本当に、何だ？　まさかで正解？　真っ逆さまで大正解？　誰が駒鳥殺したか？　お前か、それとも俺か？　俺がお前でお前が俺で？　それでいいか？』

？駆？は謎かけめいた言葉で翻弄し、嗤う。

「何を……言って」

「チェシャーキャットか、ハンプティダンプティか？　どちらだって構わんよ。或いは、トゥイードゥルダムとトゥイードゥルディの関係か？　結構だ結構だ、それもいいかもしれん。

何にせよ、俺達にとってはお互いがジャバウォックのようなものだ。不思議の国も鏡の国もなく、マザーグースやナーサリィライムズでもないが、そんなことどうでもいいだろう？』

会話にならない会話が続く。

余りの状況に駆は気が狂いそうだった。

「お前……何を企んでる？　俺をどうするつもりだ……？」

『企む？　どうするかって？

何もしないさ。ただ漫然とそこにいるだけで、企むなどという事

は出来んよ。ハートの女王のようにインチキもできん。かといってアリスでもないがね』

「……」

ニヤニヤと、それこそチェシャ猫のように笑いながら、?駆?は飄々と嘯く。

駆をただ見下ろしながら、心底から楽しそうに嗤う。

駆の悪寒はさざ波のように強くなり、弱くなる。

『そろそろか。まあ、精々うまくやれ。お前の自己同一性（アイデンティティー）のために、奪い、奪われろ』

「……」

ふざけた様子から一転、真剣になった?駆?はまたも謎めいた一言を残し、消えていく。

後に残されたのは、震えながらアスファルトに這う駆だけだった。

自身の境界が曖昧になっていく事に恐怖し、混乱しきった頭では何も考えられず、身体を動かすことなどできる筈もない。

駆は、自身を侵食し変革せんとする拒絶の違和感に怯える事しか出来ない。

しかし、それもすぐに終わる事になった。

「……？」

突然、全身を纏う違和感の質が変わったことに駆は驚くと、ゆっくりと身体を起こす。

先程までの異常が嘘であったかのように、身体は元気を取り戻していた。

「どうなってるんだ……？」

かといって、全てが同じわけではない。それは、駆の手首にある不可思議な紋様が物語っていた。手首に絡みつくかのような鎖の紋様は、やがて染み込むように肌に消えていく。

驚きを以て見つめ、立ち尽くす駆の耳に、誰かが走ってくる音が入る。

慌てて振り向くと、そこには奏の姿があった。

ポカンとして見つめると、奏は慌てたように立ち止まり、首を傾げる。

「はぁ、はぁ……あれ？　静原君？　もっと先に行ってしまったのかと……」

「いや、気分悪くて、休んでた……」

「そう……なんですか？　でも、ここ……」

気まずげに目を逸らす駆を不思議そうに見ながら、奏は辺りを見

回す。

人通りのほとんどない裏通りと言ってもよさそうな程細い道。日の長くなり始めた五月でも、遠慮なしの薄暗さを保っている。

どう見ても、帰り道には見えない。

そんな考えが伝わったのか、駆は苦笑する。

「近道なんだ。だらしない奴がいる所為で、夕食は俺が作ってるから、早く帰れる裏道の方が都合がいい」

「そ、そうなんですか……」

呆然と駆の言葉を聞いていた奏だが、ハッと我に返る様子を見せると、気遣わしげな表情で口を開く。

「それより、何かありました？」

「何……？」

その一言だけで、駆の気配が変わる。

手負いの獣が狩人に最後の抵抗を示すような殺気じみた気配が濃密に広がり、警戒した表情のまま一歩、二歩と後ずさる。

今、彼女は何と言った？

何かあった、と訊いた？　いや、それも当然。急に帰ってしまったのだから、心配したのだろう。そうに決まっている。

（でも……本当に？）

駆の中で疑念が膨らんでいく。疑心は暗鬼となって駆の心の内に滑り込み、不信を築く。

（それだけなのか？　この子は、御堂はあの世界にいたじゃないか。あの世界が何なのか知ってるじゃないか。だったら、アイツのことだって見えていたんじゃないのか？）

膨らんだ疑念は正常な思考を奪う。只でさえ混乱していた頭に掛けられた一言は、駆の中にある狂気を呼び起こしていた。

「お前は……見えているのか？」

「え？」

ギリギリと歯を食いしばりながら発せられた駆の問いに、奏は不意を突かれたかのように驚く。それは更に駆の疑念を促進させる引き金となった。

「お前は……誰だ？　どうして俺を追ってきた？　何を見ているんだ？　俺か？　それとも、アイツなのか？」

「静原君……？」

駆の目は焦点が合っていなかった。この状況において、既に正気を失ったとも言える。混乱と疑念に膨れ上がったストレスが、駆の心を押しつぶしていた。

ざり、ざり……と駆は右の手首を引っ掻く。紋様が浮かび上がっていた場所だ。赤い跡がつき、やがて爪を立てるに従って皮が捲れ、血が染み出していく。

「静原君、止まってください！　何が見えてるんですか！？」

「見えて……？　何を？　俺は見ているのか？　見られているのか？　誰に？」

駆は頭を抱えながら呻く。しかし、狂気に濁った瞳は忙しなく動き回り、何処とも知れぬ場所を睨み付けている。

奏の事も目に入ってはいるが、認識していない。

奏に問いかけられていた筈の言葉はやがて自問のようになり、意味のない音に成り下がっていた。

「拒絶する……全部……お前が、俺も！」

「静原君、目を覚ましてください！　そこには何もない――――静原君を傷つけるものなんてないの！

だからお願い……目を覚まして！　静原君！　――――駆君！！」

「あ……」

その声は、濁っていた駆の意識を一気に醒ますほど鮮烈なものだった。

駆の目に焦点が戻り、ガクリと力が抜ける。頭を抱えた手を下し

ながら、駆は傷ついた自らの手首を見つめていた。

「俺……また……」

駆の脳裏に、あの日の事が甦る。

気づいた時には傷だらけ、自らを傷つけて嗤っていたあの時と、全く同じだった。

あの時は独りだったからまだ良かった。しかし今、目の前には奏がいる。彼女を傷つけていたかもしれない――――それは駆に強い罪悪感を与える。

傷つけた手首より、どうしようもない自分より、目の前の不安そうな奏を見る事が辛かった。彼女を疑った事実が痛かった。

苦痛に歪んだ顔で俯く駆に、奏がゆっくりとした調子で声を掛ける。

「静原君……」

「……」

「静原君、ごめんなさい。私、もっとちゃんと、話すべき事をきちんと話すべきでした」

静かな謝罪に駆は肩を震わせると同時に声を絞り出す。

奏は謝罪する立場ではない。寧ろ、駆が謝罪すべきなのだ。

「なんで謝る……御堂は何もしてない」

「いえ、知っていた事を話さなかっただけで、それはもう何もしなかった事と同義です。

私は、静原君と違って幼い頃からあの世界、？共鳴世界？に触れていました。静原君が知らない事を知っています。

あの世界は、私に謎かけをしてるんです。答えのない問いかけの答えを探す為に、私達は呼ばれています」

「俺、お前をさっきまで疑ってた。悪い夢を見たんだ。アイツは俺の知らない俺を引きずり出していった。アイツこそが俺の鏡なのに。

弓で射殺された駒鳥みたいに、俺もあっさり消えていくのか……！？すすり泣かれて溜息吐かれて、ただ鐘が鳴るのを待てって言うのかよ……！？

そんなのは嫌だ。俺は消えたくない……！　俺の中には何があるんだ。どうしてそんなものがあるっていうんだ！？」

会話にならない。

奏の言葉は耳に届いているし、理解もできるがそれだけだ。今の駆には受け止められるだけの余裕がない。

只震えながら、壊れかけたものを繋ぎ直すだけで精一杯なのだ。

奏はそれを理解していながらも話を続けている。会話にならなくて構わない。この会話は、お互いの罪を見せ合うためだけの懺悔だ。そんな会話には意味がない。

だが、言葉には意味がある。醜い逃避であろうと、美しい言い訳であろうと、紡がれた言葉には意味がある。

お互いがお互いの言葉の意味を分かりあえばそれでいい――少なくとも、今は。

「共鳴世界に呼ばれるのは、私達だけじゃないです。もっと沢山の人が、あの世界に呼ばれ続けている。それはきっと、現実を生きる上で落としてしまったものを探すため。でも、世界は優しくなんてない。

得るためには、奪わないといけないんです。チェスで相手の駒を取るのと同じように、答えという勝利を得るために、誰かから奪わないといけない。

それを、試練と呼んでいます。私達は、チェス盤と駒です。与えられた力という駒で、私達自身の試練というチェス盤でゲームを続けるしかないんです」

「……」

いつしか駆の言葉は止まり、奏の言葉だけが響いていた。

それはもう懺悔ではなく、説明のラベルを付けた、ただ疲れ切った少女の嘆きのようにも聞こえた。

「静原君は、力を手に入れました。でも、今はそれは話せません。次にあの世界に入った時にお話しします。

静原君、私は、私を信じてくださいなんて言えません。でも、静原君の答えは、きっとそこにあります。だから――――――」

「?私は誰で、何処から来て何処へ行くのか??」

「え?」

ぽつりと呟いた駆に話の腰を折られ、奏はキョトンとする。

それほどまでに唐突だった。

「答えのない問いなんて、それぐらいしか知らない。でも、俺はその答えが欲しいんだ。

俺は曖昧なんだよ。漫然と生きてるだけで、何も為し得る事なんかできない。だからアイツが現れたんだろう。

ジャバウォックなんて、言いえて妙な話。自分の正体が分からないのに、向こうが自分だって分かるなんて、悪い夢だ。

歪んだ鏡の向こうにあるのが答えなら、進んでみるしかないじゃないか」

「静原君……？」

奏には何を言っているのか分からないだろう。

駆は驚きの表情で固まっている奏を見るとほんの少し笑う。

ムッとしたように眉を顰めた奏に苦笑し、目で悪かったと伝える。伝わったかどうかは知らないが、心底から怒られていたわけではないし、奏もすぐに笑顔を浮かべてくれたので良しとする。

駆はそのまま独白を続ける。

「誰も信じられないから、自分も信じられない。なら、そこに自分はあるのか？　此処にいる俺は誰で、そこにいる俺は誰だ？

拒絶できない拒絶は、きっと俺自身。何処まで行っても付いてくる、俺の歪み。

なら、拒絶しよう。自分の無知を、無力を拒絶しよう。答えを得るために拒絶しよう。拒絶して拒絶して、いつか歪みと共鳴できるまで」

「……静原君」

駆は何も知らない。ただ共鳴世界に選ばれただけ。

でも、それは必然だ。理由が明確でも曖昧でも、ただそう在ったから選ばれる。

面を上げた駆の顔は、憑き物が取れたかのように清々しい。独白は決意のようにも聞こえた。

「……試練は、厳しいですよ？　何をすればいいのか、何をすべきか、それすら分からないのですから」

無謀な子供を諭すように、奏は警告する。

駆はまだ何もしていない。あの世界に入っただけなのだ。全てが未知数な世界では、半端な意思などすぐに淘汰される。何年もそれを見ていた奏だからこその警告だった。

その警告に、駆は一つ溜息を吐く。

油断する気は更々ない。元より未知数な物、警戒するに越したことは無い。だが、悲観するつもりもなかった。

変化し始めた世界は、駆に一つの予感を感じさせていた。

共鳴世界で感じた懐かしさ、それは思い違いでも何でもなく、あの日に失くしてしまった物が其処にあるからこそだと。そして、奏と一緒なら、それを探し当てる事が、きっとできる――――――と。

その思いを隠しつつ、駆は口を開く。

「……そうだな。次に何があるか分からないが、覚悟だけはしておくよ」

「ふふっ……」

だが、奏は隠したものを見抜いたらしく、小さく笑いを漏らす。

何となく気恥ずかしくなり、駆は憮然とした表情を作った。

「何だ？」

自分らしくないのは駆にも分かっている。あの日以来他人を避け、一切信用しようとしなかったのに、今は奏をあっさり信じようとし、厚かましくも頼ろうとしているのだ。現金にも程があるというものだろう。

そんな駆の心中を理解しているのかいないのか、奏は可憐な笑みを浮かべる。

「いえ、何でもありません。私も、頼りにさせて貰いますね。

……静原君、これから、よろしくお願いします」

「……？　ああ、色々とな」

最後に付け加えられた今日二度目の挨拶は、何処か助けを求めるような、懇願するような響きを持っていた。

その違和感に内心で首を傾げつつ、駆は頷く。

奏は一瞬寂しそうな表情を見せるが、駆が疑問を持つ前に微笑みに戻ってしまう。

「では、私は帰りますね」

「あ、ああ……遅くまで悪かったな」

バツが悪そうに苦笑する駆に奏は首を振る。確認したケータイの画面に映る時計は七時を回ったことを示していた。

「いえ、大丈夫です。静原君も、気を付けて帰ってくださいね？」

「その科白はあんた……じゃないな、御堂に返すよ」

まるで言い聞かせるような様子の奏に、駆は苦笑する。無粋な二人称を使いかけたが、すぐに思い直して名を呼ぶ。

奏はそれに嬉しそうに微笑んだ。

とはいえ、駆の科白は挑発でも何でもない。

流石に七時台となれば辺りは暗く、男である駆は特に心配はないが、奏は女の子な上、その容姿は十人が十人美人と言う程で、更にスタイルも良いとなれば大変目を引いてしまう。

正直、その辺の馬鹿な男共に襲われないか心配である。

「大丈夫ですよ。それでは静原君、また明日会いましょう」

「ん……ああ、また明日」

小さく微笑を交わし、二人はそれぞれ踵を返す。

駆が僅かに振り返ると、奏が曲がり角で小さく手を振っていた。苦笑し、手を振り返す。

奏の姿が消えると、駆は苦笑を更に深くする。

らしくない自分に呆れつつ、駆は再び歩き出す。

そこでようやく隣人の事を思い出し、盛大に溜息を吐く。夕食が遅れた事への理不尽な愚痴を聞くのはひどく億劫だった。

＊　＊　＊

「ただ今帰りました」

家に着いた奏は玄関の扉を開け、小さくそう言うが、答えは返ってこない。

庶民の家というには広すぎるその家は屋敷と言っても差支えのな

い程大きく、奏の遠慮がちな小さな声は虚しく響き渡っていた。
いつまで経っても帰ってこない返事を気にすることもなく、奏は扉を閉めると鍵を閉める。
「はぁ……」
知らず、溜息を吐く。
奏にとってはいつもの事ではあるのだが、寂しさまでは拭えない。
父も母も多忙で、家に居る事の方が珍しい。たった一人の妹も、今は奏を避けている。
奏は、この家で独りだった。
静かな廊下を渡り、部屋に辿り着くとベッドに身体を投げ出す。
夕食を取る気にはなれなかった。
(皆、良い方ばかりだったな……)
思い出すのは、今日一日で親しくなったクラスメイト達の事。
明るく人当たりの良い、人気者の美紀。
お調子者だが、人を笑顔にさせる事に長けた暁彦。
穏やかな性格ながら、素晴らしい気配りを見せる朱莉。

そして――――――

「静原君……」

思わず口に出した名前は、ぶっきら棒で冷たい言動の少年――――――静原駆。

それでも、あの世界で見た彼の表情は、何にも染まらず、穢れてもいない透明な物だった。

何かを懐かしんでいながら、その場所に一切の興味を抱かずに何かを探求しつづける瞳。

その周辺に漂う何処か不思議な違和感のある気配すら、彼を際立たせていた。

だからだろうか。

彼になら自分の?声?が届くと、助け出してくれると希望を抱いてしまうのは。

「静原君……」

もう一度、奏はその名前を呟く。

届いてほしい。

気付いてほしい。

何年も何年も、誰にも届く事のなかった声に。

「――――――」

その呟きは小さく、余韻すら寝息に掻き消されてしまった。

暗い孤独の部屋で、奏は深い眠りについていた。

第三話　Who killed Cock Robin？（後書き）

感想、批評等お待ちしております。

展開が早過ぎるような気がしますが、うーん……力不足ですね。

まだまだ甘い所もあるし、精進していきたいと思います。

それでは！

カモメレポート1

久しぶりだね。寂しかったかい？

全然？　酷いな、僕の気持ちを弄んで……ごめん、僕が悪かったから釘バットなんて振りかぶらないでくれ。前時代的にも程があるっていうのに、そんなので死んだら笑い者も良い所だよ。気持ちいいから歓迎なんだけどね、本当は。

さて、そろそろ話を始めようか。

前回の僕のレポートから既に十年が経っている。

つまり、共鳴世界を見つけてから既に十年だ。早いものだね。でも、僕にとっては一瞬に過ぎないし、永遠と同じくらい長い時間だったことを記しておこう。

色々と出会いがあったけれど、どれも意味のないものだったよ。ま、たった一人例外はいたけれど、彼女もあのままならつまらないその他と同じだね。エロゲー……もとい、美少女ゲームならモブキャラって位置づけだね。

けど最近、とても楽しい事が起きた。

僕が住んでいるアパートに、男の子がやってきた。どうやら今年から高校に入るらしい。

一人暮らしは珍しいから、彼に内緒で少し調べさせてもらった。

いやぁ……嬉しすぎて狂うかと思ったよ。元から狂ってるんだけど。

はっきり言って、最高。歪みまくってグチャグチャだ。只の喧嘩で此処まで自分の世界をここまで歪められるなんて、実に素晴らしいとしか言いようがないね。

親も親で面倒な性格してるし、まったく、彼は世界に愛されてるとしか思えない。

喧嘩したってのは偶然じゃないね。必然だ。彼はそう在るようにあの世界から躾けられていたのかもしれない。

……褒めてるんだよ？

とにかく、一目見て分かった。彼もまた、選ばれるに足る人間だと。

実際彼は僕を初っ端から拒絶してくれたしね。

人間不信ってレベルじゃないね、アレはもう人間拒絶だよ。壁造って何も見ない様にしてる。

まぁ、そのまま壊れちゃっても嫌だから、ちょっとだけ手を出させてもらう。

といっても道から外れたことはしないけどね。僕は非道ではあっても外道じゃないし。

単純に、友達になるってだけだよ。

さて、彼について続けよう。

彼が本当に面白いのは、性格じゃない。彼は性格に関してはまともだからね。

どうやら彼、自己像幻視してるらしい。

ドッペルゲンガーを見てるって事だよ。なんで分かるのかと言えば、彼ってば偶に一人でブツブツ言うし。それに何より、僕は見えないものも視えるからね。

共鳴世界に入ってから、僕は色々おかしくなったけど、本来あそこで得た能力はこっちでは影響しないはずなんだけどね。

ま、僕の話はどうでもいい。どうでもよくないが、どうでもいい。

さてさて、彼が見ているもの、それは確かにドッペルゲンガーだ。

けれど、本来ドッペルゲンガーなんて脳に腫瘍が出来てれば見えるかもしれない程度のものだし、オカルトだって眉唾みたいなものなんだけど。

でもまあ、本人にとってはそんな事は関係がない。彼にとって、もう一人の自分がお天道様の下を闊歩しているのは紛れもない事実で現実だ。他者に見えるか見えないかなんて、それこそ彼にとって

意味のない議論な訳さ。

彼にとってもう一人の自分というのは危機感を覚えるようなものなのだろうけど、僕はそう思っていない。

むしろアレは、彼の中で抑圧されている心そのものだとも思っている。

彼は子供なんだ。年齢や体つきの事ではなく、精神的に。

大体、喧嘩をしたところで時間が経てば解決する。親の心子知らず、子の心親知らずなんて言うけど、そんなの成長すれば自ずと理解しているものだろう？

彼はもう今年で十七歳になる。忘れていたけれど、彼が隣人となって一年が経過している。混乱しないで、遅れないでついてきてよね。

さて、結局彼は今年になっても親を許そうとはせず、周りの人間に心を閉ざし続けている。

だけど、子供が一人で生きていけると本当に言えるだろうか？

答えは否だ。

一人が寂しくない、寧ろ歓迎なんて人も中には確かに存在する。けど彼は全くの逆だ。

彼は本来他人がいなければ何も出来ないタイプ。

言い換えれば、他者との信頼関係を最も重んじ、自身の心の赴くままに他者と関わりその絆を強くする人間。

まるでどこかの物語の主人公のようだけれど、彼の人間性とはそういうものだ。そんな人間が、他者を拒絶するのはどれだけのストレスが掛かると思う？

それだけじゃない、彼は『裏切られている』。もちろんこれは彼の解釈であって僕達からすれば鼻で笑う程小さいものだけれど、彼にとってはトラウマだ。

親というのは子供が最初に接する他人。そして、最も信頼を寄せる人間でもある。そんな人物から、自身の意に沿わない行動をされ、勝手な理屈を押し付けられれば裏切られたと思っても仕方のない事でもあると言えなくもない。

そして、それが彼を一層歪める事になっている。信頼が裏切られた事に対する絶望と、これからも裏切られるかもしれないという不安。

本来なら振り切れるはずのその歪みは、しかし歪み故に彼の心に棘を残す。

じわじわと、ジクジクと痛んで彼を放すことは無く、今も縛り続けている。

それがドッペルゲンガーの形となって彼の前に現れた。人格を持っているのは疑問が残るけど、それは僕達から見た観点。彼からすれば、そこにいるのは自分なのだから、お喋りしてもなんらおかしい事じゃない。

では、此処から先はドッペルゲンガーと自己同一性（アイデンティティー）の関連について話そう。

医療的な観点からすれば、ドッペルゲンガーとは自己像幻視の名の通り、そこに自身の姿を錯覚するというだけなのだから人格を持つことはまずあり得ないと言っていいだろう。

逆にオカルトな見解とすると、それを見た者は死ぬ、或いは逆に幸運が訪れるとされている。そして、ドッペルゲンガーは写し取った人間を殺し、その人物にすり替わるというものもある。

それから、これは両方に共通する事だけど……ドッペルゲンガーを見た人間というのは、目の前にいるその姿を完全に自分だと認識してしまうという事だ。

でも、果たして正気でいられるだろうか？　寧ろ、殺意を抱くのが当然の筈だ。

一般に言う『私』とはつまり、この世に一人しかいない。どれだけ同じように似せても、他人が自分になる事はあり得ない。だからこそ、僕達の自己同一性は保たれている。けれど、ドッペルゲンガーはその前提を真っ向から否定してしまう。だって、そこにいるのは完全に自分なのだから。

気が狂ったって別におかしくはないんだよ。

分かりやすい例えをするのなら、今、君の目の前にマネキンがある。そこに加工を加え、君の顔、肌の手触り等全てを正確に、本当に見分けがつかない程に投影したらどう思う？

多分、これだけなら問題ないだろう？　そこにあるのは姿だけが君の『人形』だから、そこに危機感を覚える筈もない。

しかし、そこに人工知能に君の声のパターンや仕草、行動パターンを入力したらどうだろう。一気に怪しくなってきたのではないかな？　何処までも正確に、何時までも人間の君として動く人形。果たして他人はどちらを本物の君と認識するだろうね？

所詮人形なんて反論は封じさせてもらう。言っただろう？　何処までも、何時までも君と同じ存在だと。

ほら、これだけで僕達の存在は途端に怪しくなってしまう。自分が本当の自分ではない事、それはとてつもない恐怖だ。もしかしたら君の友人達は君ではなく、そこにある人形を君だと認識し、君を人形と断ずるかもしれない。君がいくら言葉を重ねて自分が本物であると説得しても、誰も君の事を信用しない。そして、人形がこう言うんだ。

「そこにあるのが人形だよ。お前らだってそうだって言ってくれたぞ？　こんな人形、気味悪いから壊しちまおうぜ」

と。

さて、これで理解してくれただろうか？　君が自分で君自身と認識していても、他者がそう認識しない恐怖を。君が君と認められる為には、君は唯一無二の存在でなくてはならない。でも、ドッペル

ゲンガーはそれを崩してしまう。

目の前にいるものが人形なら、壊してしまえば自己同一性は保たれる。でも、ドッペルゲンガーは消えてくれないんだ。君が自殺するか、目の前の君をどうにかしてしまわない限り、悪夢は続く。

ほら、とても正気なんか保っていられないだろう？

では、彼との関連に話を戻そう。

先程の話を前提とするならば、彼は既に狂っていなければならない。

だけど彼は自己同一性を確立し、真っ当に生きている。多少の障害はあるようだけど、それも彼を揺らがせる事はなく、逆にドッペルゲンガーを正面から受け止めて心を保っている。

ほら、彼の異常性が見えたろう？　彼は正常なんだ。彼自身の存在が怪しい癖に、自身の輪郭を保っている。

それが難しいどころか不可能である事は自明の理だ。存在の危機の前に、心を保てるものがいるものか。けれど彼はそれを容易く行っている。

ああ、でもそれは当然なのかもしれない。書いた筈だけれど、彼のドッペルゲンガーは彼の抑圧された心そのものだと。自分の心を見ているのなら、拒否などするはずがない。自分の心を殺せる、捨てられる人間はいないのだから。例え認めなくても、拒絶は出来な

いんだ。

拒絶できない拒絶――――――

彼はかのドッペルゲンガーを自身の心とは認めていない。拒絶し続けているけれど、拒絶出来ていない。

拒絶しているのに、その拒絶すら自分で拒絶してしまう。巡り巡って元通りの堂々巡り。ウロボロスみたいに輪になって、メビウスの輪のように果てがない。

でも、それでいい。そうでなくてはならない。

つい先日、彼は力を手にしたようだ。

彼の右手首に鎖のような文様が視えた。彼はこれから、試練と向き合っていくだろう。

それにしても、彼の隣にいた少女、アレは懐かしい顔だ。最初に書いた唯一の例外、彼女もいい感じに面白くなっている。生憎と試練の答えは見つけてはいないようだが、彼に興味があるらしい。何やら協力を求めるような事を言っていた。

ああ……興味深い。

彼と彼女がお互いにどんな影響を与えるのか。拒絶できない拒絶をし続ける彼と、届かぬ声を届かせる彼女。

彼等の心は試練と、待ち受けるもの達と、彼ら自身と……どのように共鳴していくのだろう？

歪みを抱える者達。

彼等こそ、僕の研究に答えを見つけるかもしれないサンプルだ。
もしかすると、僕の本当の試練もここから始まるのかもしれない。

さあ――――――開幕を告げよう。

二〇五〇年　五月十三日　K．U

カモメレポート1（後書き）

感想等お待ちしております。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7022x/

Resonance?W?

2011年11月19日11時52分発行